

令和7年度

学力調査結果報告書

- 全国学力・学習状況調査
 - ・ 国語、算数・数学、理科
 - ・ 児童生徒質問紙
- 福岡県学力実態調査
 - ・ 国語、算数・数学

令和7年10月

大野城市教育委員会

も く じ

- I 全国学力・学習状況調査の概要・・・・・・・・・・P1
- II 全国学力・学習状況調査結果の概要・・・・・・・・・・P2
 - 1 小学校（6年生）各教科の平均正答率
 - 2 中学校（3年生）各教科の平均正答率
 - 3 概況
 - 4 経年変化
 - 5 四分位層比較
 - 6 同一集団比較
- III 全国学力・学習状況調査校種及び教科別調査結果・・P8
 - 1 小学校国語
 - 2 小学校算数
 - 3 中学校国語
 - 4 中学校数学
- IV 全国学力・学習状況調査
児童・生徒質問紙調査の結果・・・・・・・・・・P12
 - 1 「学びに向かう力、人間性等」に関する回答状況
 - (1) 学びを調整する力
 - (2) 粘り強く挑む力
 - (3) 自己有用感・自己効力感
 - (4) 協働する力
 - (5) 経年比較
 - 2 その他（生活に関する項目、学校生活に関する項目、授業に関する項目）
- V 令和7年度福岡県学力調査結果・・・・・・・・・・P23

I 全国学力・学習状況調査の概要

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、教育に関する検証改善サイクルを確立する。

また、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

2 調査の対象とする児童生徒

小学校第6学年、中学校第3学年

3 調査方法

(1) 児童生徒に対する調査

ア 教科に関する調査

国語、算数・数学、理科

イ 質問紙調査

学習意欲や学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査

(2) 学校に対する質問紙調査

学校における指導方法に関する取組や学校における人的・物的な教育条件の整備の状況に関する質問紙調査

4 調査日

令和7年4月17日(木)

5 調査した児童生徒数 [単位：人]

小学校	国語	算数	理科
大野城市	995	995	998
福岡県(公立)	42,143	42,159	42,217
全国(公立)	936,137	936,399	936,576

中学校	国語	数学	理科
大野城市	932	934	931
福岡県(公立)	40,284	40,323	40,221
全国(公立)	870,560	871,097	864,634

Ⅱ 全国学力・学習状況調査結果の概要

調査結果について、大野城市と福岡県、全国の平均正答率を比較する。また、同一集団の令和6年度と令和7年度の福岡県平均正答率による比較を行う。なお、令和7年度は理科も実施されたが、昨年度実施されていないため結果のみを表示することとする。

- 正答率は問題数に対する正答数の割合を百分率で表した値
- 全国比は、全国を100とした場合の大野城市の平均正答率
全国比の算出方法は、(本市平均正答率÷全国平均正答率)×100とする

1 小学校（6年生）各教科の平均正答率

＜児童数：国語 995名 算数 995名 理科 998名＞

	国 語	算 数	理 科
大野城市	72.0	62.0	60.0
福岡県（公立）	68.0	57.0	57.0
全 国（公立）	66.8	58.0	57.1
全国比【前年度差】	107.8【-2.9】	106.9【-3.5】	105.1
R6大野城市	110.7	110.4	

2 中学校（3年生）各教科の平均正答率

＜生徒数：国語 932名 数学 934名 理科 931名＞

	国 語	数 学	理 科
大野城市	57.0	54.0	51.2
福岡県（公立）	54.0	47.0	49.7
全 国（公立）	54.3	48.3	50.3
全国比【前年度差】	105.0【±0】	111.8【+3.2】	
R6大野城市	105.0	108.6	

※中学校理科は平均IRTスコア

3 概況

【小学校】

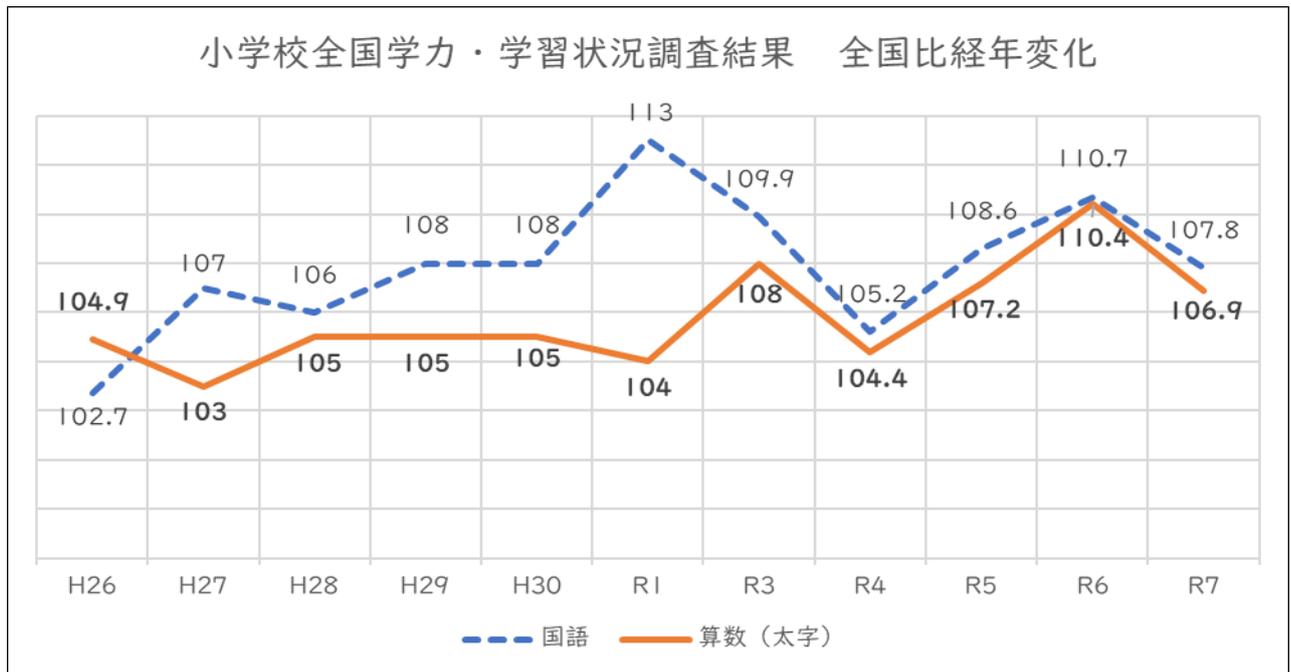
- 全ての教科（国語、算数、理科）が全国及び福岡県の平均正答率を上回った。
- 全国比については前年度の本市の結果と比較すると国語が2.9ポイント、算数が3.5ポイント下回る結果となった。

【中学校】

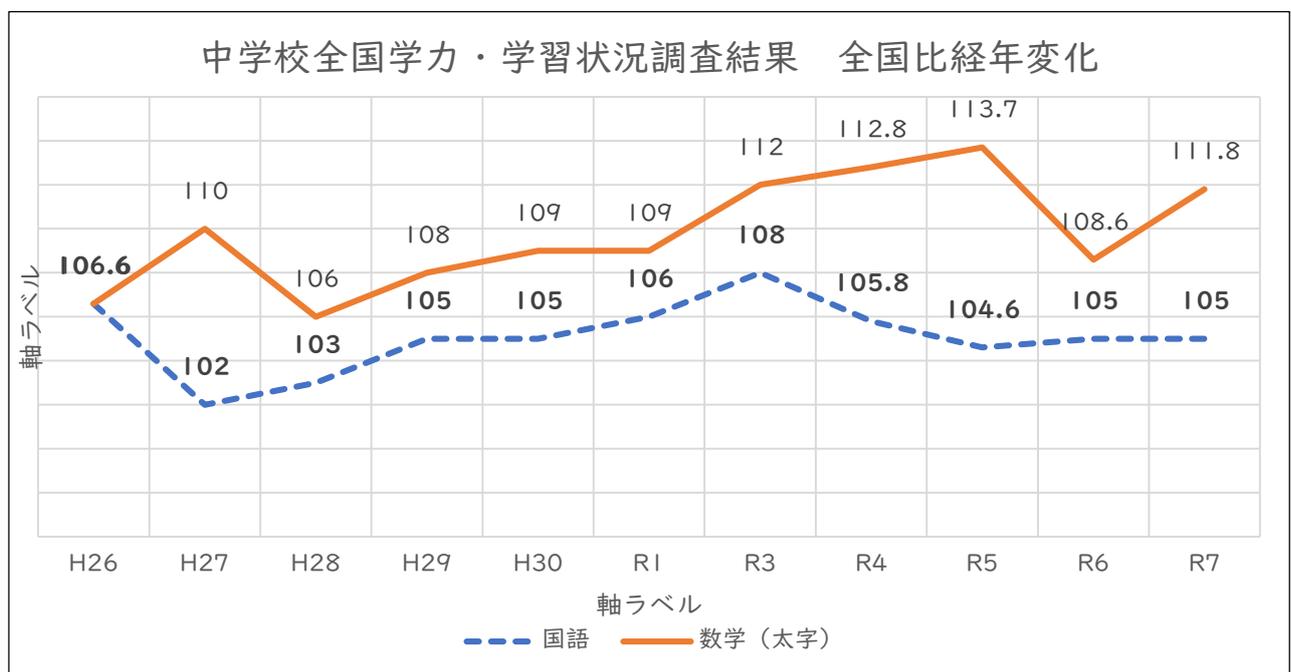
- 国語、数学ともに全国及び福岡県の平均正答率を上回った。
- 全国比については、前年度の本市の結果と比較すると国語は前年同様、数学が3.2ポイント上回る結果となった。
- 小・中学校いずれも全国及び福岡県の平均を上回る結果となっており、本市の学力が高水準で維持されていることが分かる。

4 経年変化

(1) 小学校



(2) 中学校



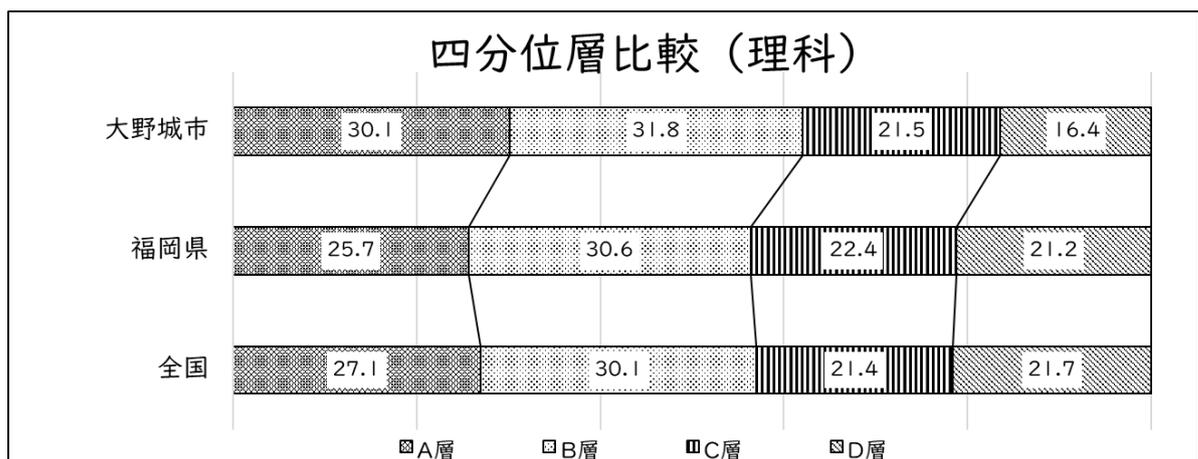
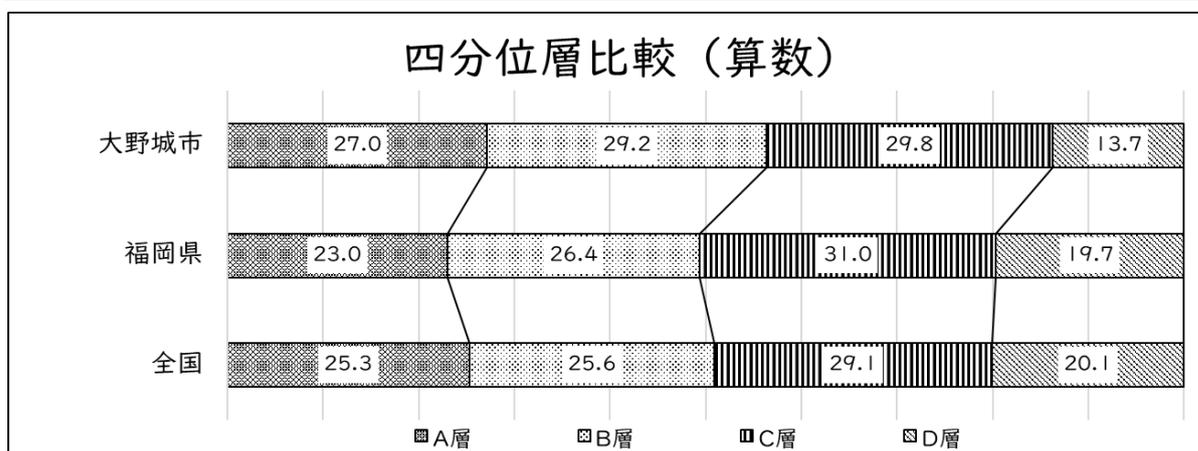
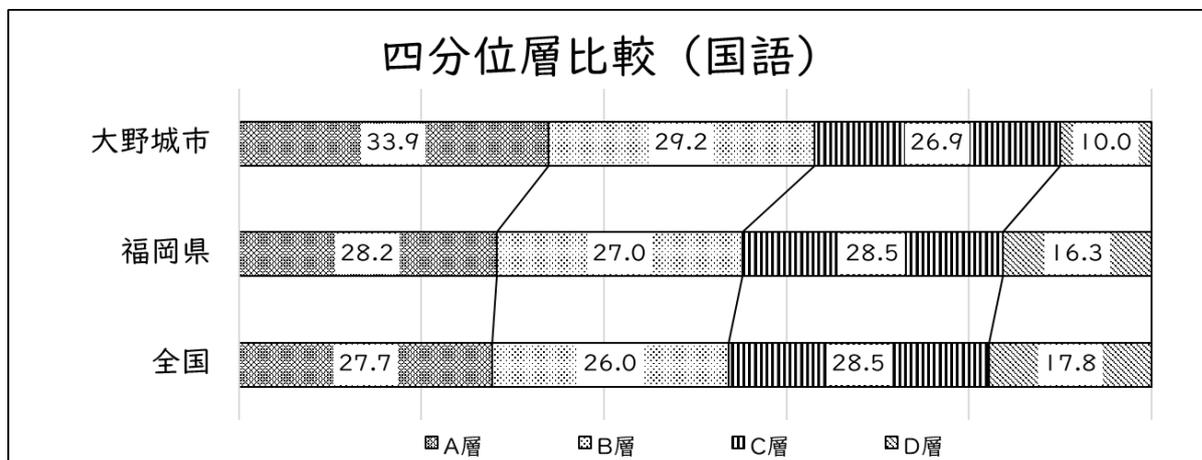
(令和元年度まではB問題の全国比)

- 小学校では国語、算数ともに令和4年度から2年間続けて数値が向上していたが、本年度は昨年から2教科ともに数値が低下した。
- 中学校では国語が令和4年度からほぼ横ばい傾向にあるが、数学は前年度から3.2ポイント数値が向上し、全国比111.8ポイントと高い水準を保っている。

5 四分位層比較

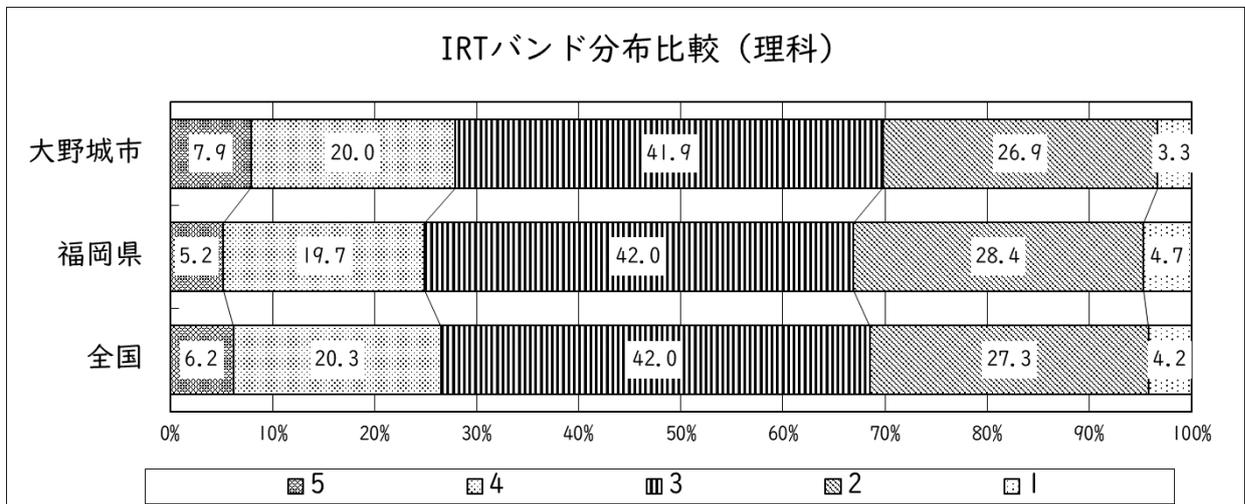
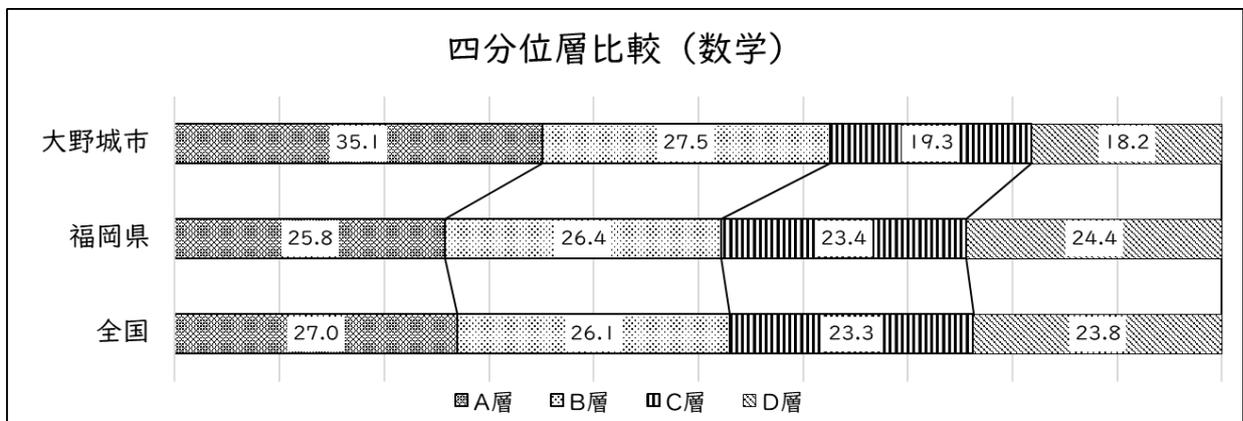
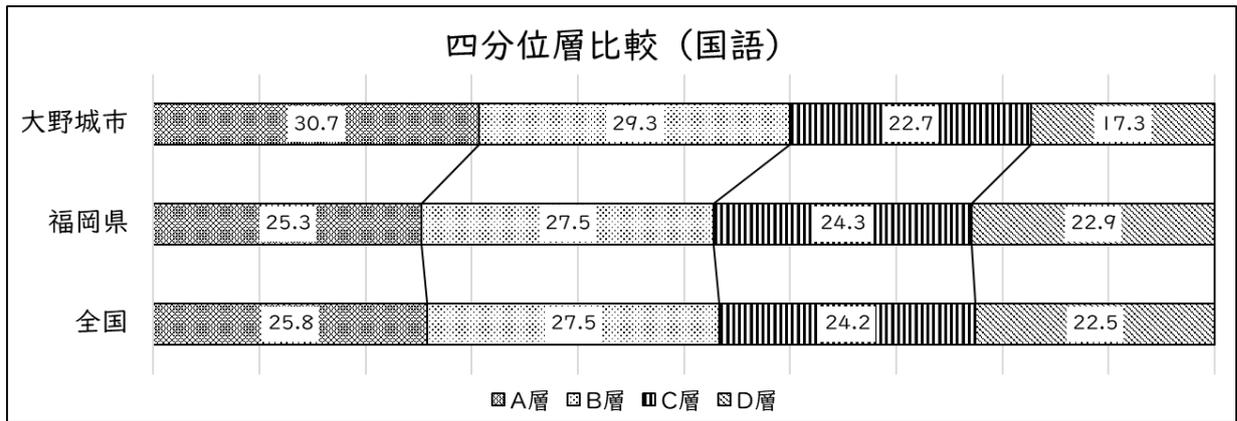
四分位数とは、全国における正答数のデータを最小値から最大値まで順に並べて、4分割した数値であり、数値が高い層からA、B、C、Dと表す。

(1) 小学校



- 全ての教科でA層、B層の割合が全国及び福岡県よりも高くなっており、高い水準で学習活動が展開されていることが分かる。
- D層の割合は全国及び福岡県と比較すると低い割合となっているが、10%を超えている。このことから、個別最適な学びと協働的な学びを一体とした授業づくりなど、全ての層の学習課題を解決していくための授業改善が必要と考える。

(2) 中学校

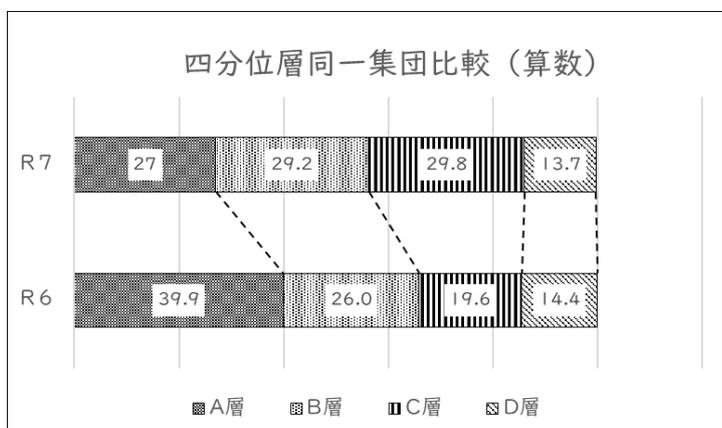
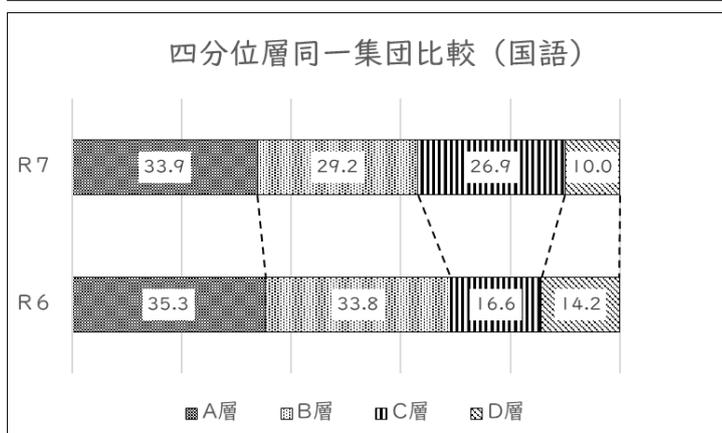
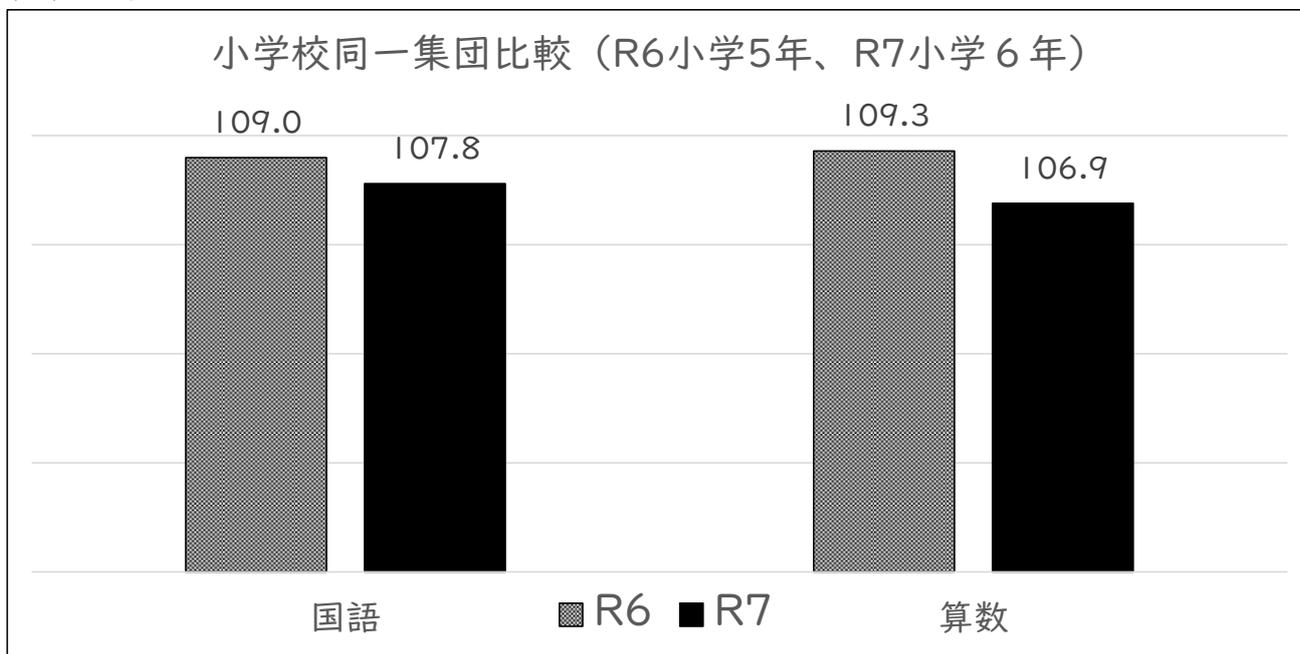


- 全ての教科で A 層、B 層の割合が全国及び福岡県よりも高くなっており、高い水準で学習活動が展開されていることが分かる。
- D 層の割合が国語 17.3%、数学 18.2%と非常に高くなっており、理解度の二極化が進んでいることが考えられる。このことから、それぞれの生徒にあった効果的な学習指導を行っていくことが必要であると考え。

6 同一集団比較

(小5、中2は福岡県学力調査の福岡県比、小6、中3は全国学力・学習状況調査の福岡県比)

(1) 小学校



○ 同一集団における全国比の経年変化については、国語が1.2ポイント、算数が2.4ポイントの数値の低下が見られた。

○ 国語における四分位層同一集団比較については、R6からR7にかけてB層の割合が4.6%減少し、C層が10.3%増加している。また、D層の割合が4.2%減少している。

○ 算数における四分位層同一集団比較については、R6からR7にかけてA層の割合が12.9%減少し、C層が10.2%増加している。また、D層の割合は0.7%の微減となっている。

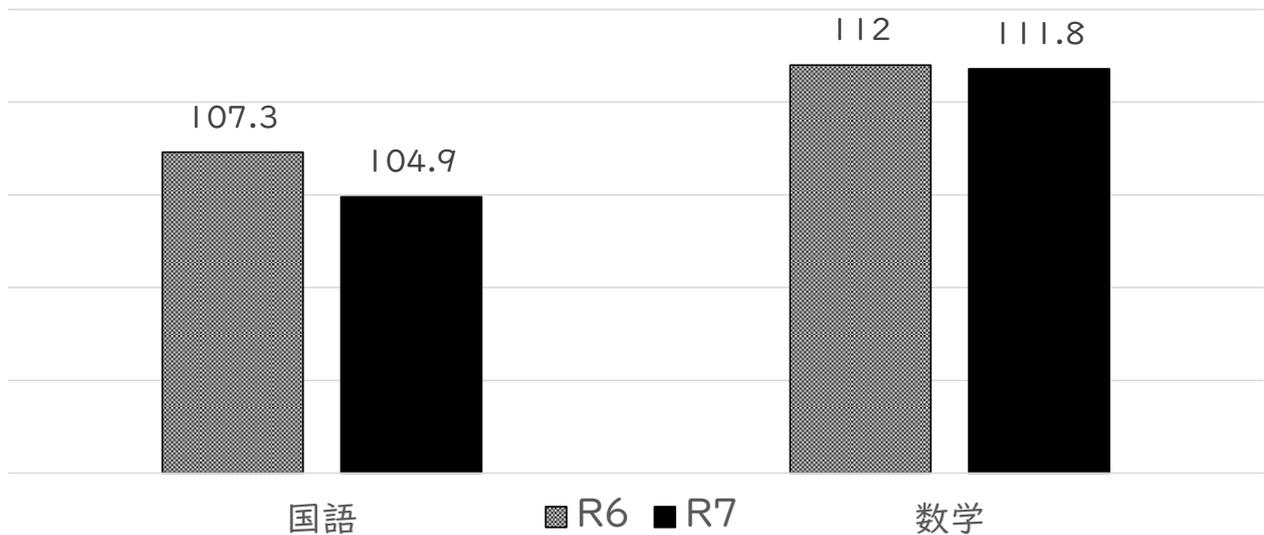
これらのことから経年変化における数値低下の要因としては、国語、算数ともに上位層だった児童がC層に移行していることが考えられる。

また、これらの状況を改善していくためには個に応じた課題や指導を充

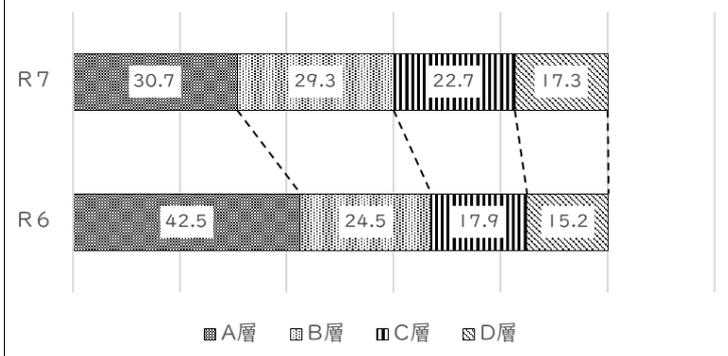
実させるなど授業改善が求められる。

(2) 中学校

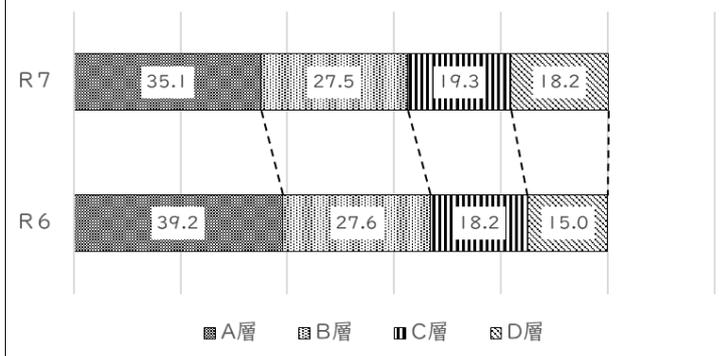
中学校同一集団比較 (R6中学2年、R7中学3年)



四分位層同一集団比較 (国語)



四分位層同一集団比較 (数学)



○ 同一集団における全国比の経年変化については、国語が2.4ポイント、数学が0.2ポイントの数値の低下が見られた。

○ 国語における四分位層同一集団比較については、R6からR7にかけてA層の割合が11.8%減少し、B層、C層がそれぞれ4.8%、D層が2.1%増加している。

○ 数学における四分位層同一集団比較については、R6からA層の割合が4.1%減少し、D層が3.2%増加している。また、B層、C層の割合はほぼ横ばいであった。

これらのことから、国語ではA層だった児童がB層に移行していることが数値の低下の要因と考えられる。また、数学については、A層の割合は4.1%減少しB、C層の割合はほぼ横ばいである。また、D層の割合が3.2%増えていることが、

全体の数値の減少に繋がっていると考えられる。これらの状況を改善していくためには、C層D層をサポートできる個別支援の場や生徒同士の学び合いの場を設定するなどの対策が必要だと考える。

Ⅲ 全国学力・学習状況調査校種及び教科別調査結果

Ⅰ 小学校国語

(1) 学習指導要領の領域別正答率(%)

学習指導要領の領域等	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
全体	14	72	68	66.8	107.7
言葉の特徴や使い方に関する事項	2	85.8	78.9	76.9	111.6
情報の扱い方に関する事項	1	66.1	63.8	63.1	104.8
我が国の言語文化に関する事項	1	84.7	81.5	81.2	104.3
話すこと・聞くこと	3	70.1	66.9	66.3	105.7
書くこと	3	75.8	70.4	69.5	109.1
読むこと	4	62.1	58.1	57.5	108.0

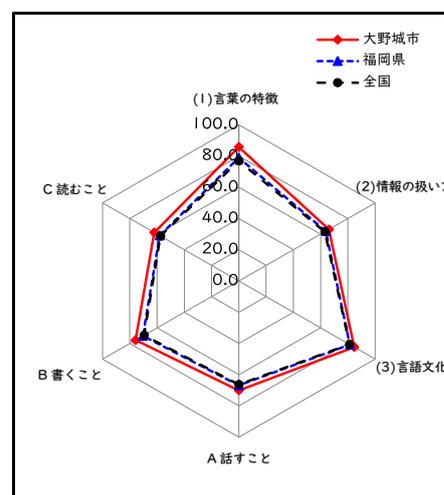
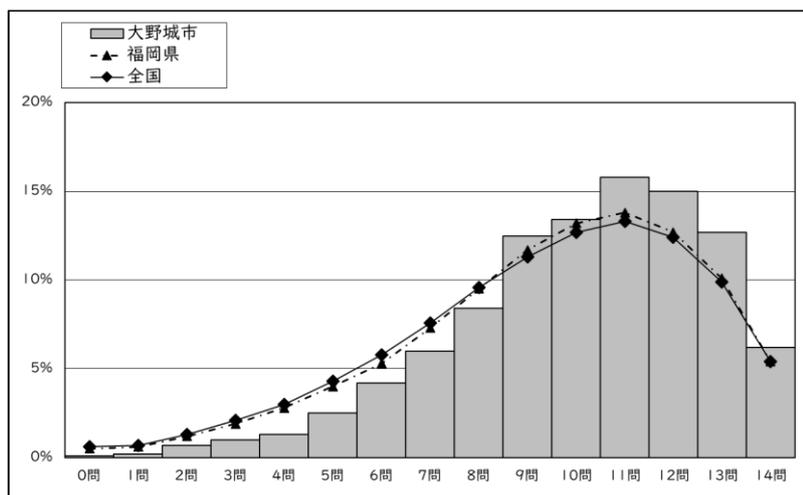
(2) 評価観点別正答率(%)

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
知識・技能	4	80.6	75.8	74.5	108.2
思考・判断・表現	10	68.6	64.4	63.8	107.5

(3) 問題形式別正答率(%)

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
選択式	9	68.2	65.1	64.7	105.4
短答式	3	85.9	79.8	78.5	109.4
記述式	2	68.4	61.2	58.8	116.3

(4) 正答数分布グラフ及びレーダーチャート



(5) 分析

平均正答率は、全ての領域において、全国を上回っている。特に、言葉が持つ意味やニュアンス、適切な使用場面、またはその言葉が使われる際の注意点などを指す「言葉の特徴や使い方に関する事項」については全国比を大きく上回っている。また、正答数分布からは、正答数が8問以下の児童が全国及び福岡県と比較して非常に少ないことがわかる。これらのことから、小学校国語科の授業においては学習指導要領における領域別の視点からもバランスのよい指導が行われていることがわかる。

2 小学校算数

(1) 学習指導要領の領域別

学習指導要領の領域等	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
全体	16	62	57	58	106.9
A 数と計算	8	64.7	61.9	62.3	103.9
B 図形	4	61.6	55.6	56.2	109.6
C 測定	2	59.7	53.6	54.8	108.9
C 変化と関係	3	60.4	56.3	57.5	105.0
D データの活用	5	67.1	62.1	62.6	107.2

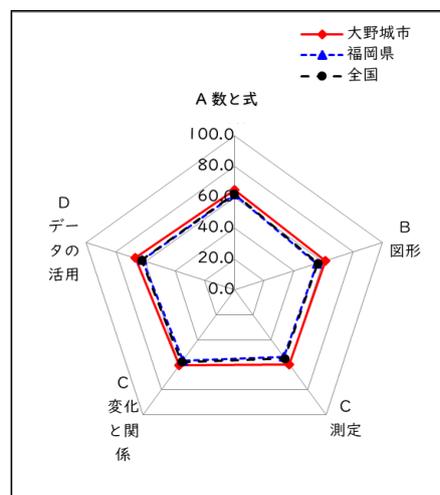
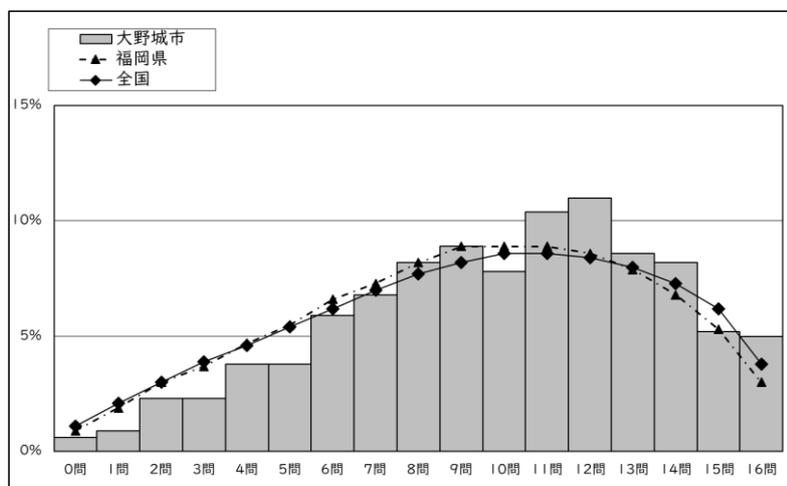
(2) 評価観点別

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
知識・技能	9	68.4	64.7	65.5	104.4
思考・判断・表現	7	53.1	47.7	48.3	109.9

(3) 問題系識別

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
選択式	6	69.9	66.2	67.2	104.0
短答式	6	67.0	63.6	64.0	104.7
記述式	4	41.4	34.5	34.9	118.6

(4) 正答数分布グラフ及び領域別レーダーチャート



(5) 分析

平均正答率は、全ての領域において全国を上回っている。特に、「思考・判断・表現」における全国比との比較が109.9%となっており、非常に高い水準となっている。

また、評価の観点について、「記述式の問い」の正答率が全国及び福岡県と比較して非常に高くなっている。さらに、領域別レーダーチャートにおいてもバランスのよい五角形が形成されている。

これらのことから、小学校算数科の授業においては学習指導要領における領域別の視点からもバランスのよい指導が行われているといえる。また、「知識・技能」だけでなく「思考・判断・表現」を育むことができていることが記述式の高い正答率につながっていると考える。

3 中学校国語

(1) 学習指導要領の領域別正答率(%)

学習指導要領の領域等	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
全体	14	57	54	54.3	105.0
言葉の特徴や使い方に関する事項	2	46.8	47.1	48.1	97.3
情報の扱い方に関する事項	0	—	—	—	—
我が国の言語文化に関する事項	0	—	—	—	—
話すこと・聞くこと	4	57.0	53.6	53.2	107.1
書くこと	5	57.6	52.1	52.8	109.1
読むこと	3	64.0	62.3	62.3	102.7

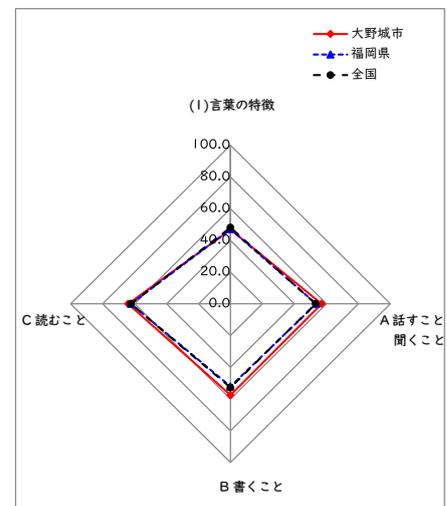
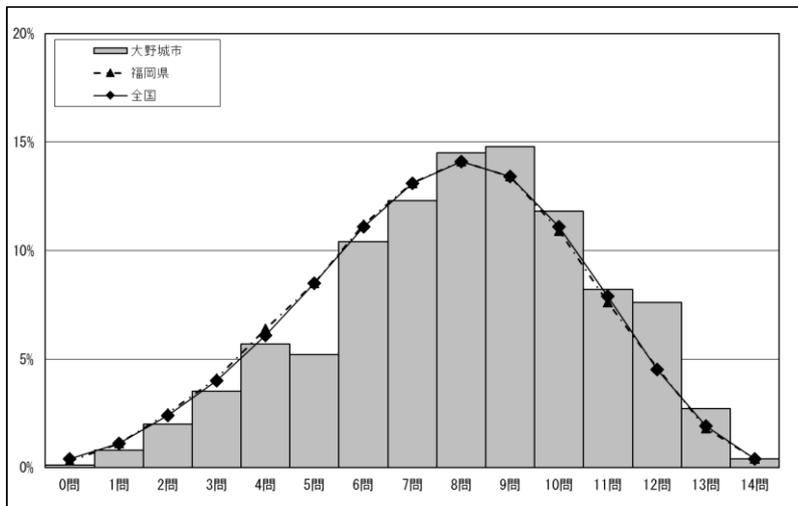
(2) 評価観点別正答率(%)

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
知識・技能	2	46.8	47.1	48.1	97.3
思考・判断・表現	12	59.0	55.1	55.3	106.7

(3) 問題形式別正答率(%)

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
選択式	8	66.0	63.6	63.9	103.3
短答式	2	78.9	73.4	73.6	107.2
記述式	4	29.0	25.1	25.3	114.6

(4) 正答数分布グラフ及びレーダーチャート



(5) 分析

平均正答率に関しては、多くの領域で全国及び福岡県の水準を上回っているが「言葉の特徴や使い方に関する事項」は全国比97.3%となった。「言葉の特徴や使い方に関する事項」は、文脈に即して漢字を正しく使うことができるかどうかをみる問いと事象や行為を表す語彙について理解しているかどうかをみる問いの全2問であった。

これらの改善に向けては、言葉のもつ意味や使い方などについて指導していく必要がある。個に応じた支援としてわからない言葉をすぐにAIに聞くことができるというようなAIを活用した対話型の言葉理解支援を行っていくことも有効だと考える。

4 中学校数学

(1) 学習指導要領の領域別

学習指導要領の領域等	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
全体	15	54	47	48.3	111.8
A 数と式	5	50.2	43.5	43.5	115.4
B 図形	4	49.5	43.9	46.5	106.5
C 関数	3	54.1	46.4	48.2	112.2
D データの活用	3	66.6	59.8	58.6	113.7

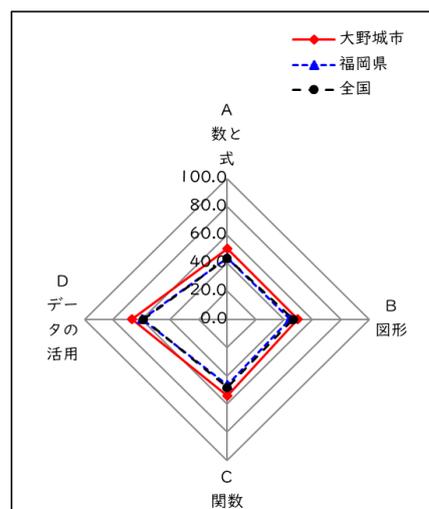
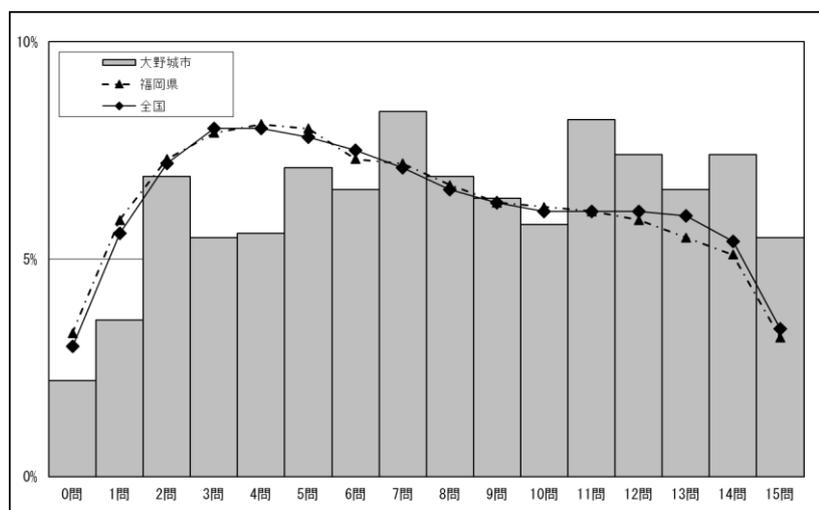
(2) 評価観点別

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
知識・技能	9	59.0	53.5	54.4	108.5
思考・判断・表現	6	46.7	38.3	39.1	119.4

(3) 問題系識別

評価の観点	問題数(問)	大野城市	福岡県	全国	全国比
選択式	3	57.6	52.7	54.0	106.7
短答式	7	56.7	50.7	52.0	109.0
記述式	5	48.2	39.6	39.6	121.7

(4) 正答数分布グラフ



(5) 分析

平均正答率は、全ての領域において、全国を上回っており、教科全体においても全国比111.8%と非常に高い水準であった。特に、「データの活用」については正答率が66.6%と非常に高かった。また、評価の観点別に見ると「思考・判断・表現」に関する問いの全国比が非常に高かった。さらに「記述式」の正答率は48.2%と高くないものの、全国比121.7%となっており、難易度の高い問いについても対応できている生徒の割合が高いといえる。

これらのことから、これまでの指導において、学習指導要領における領域別の視点からも十分な指導が行われていることがわかる。

IV 全国学力・学習状況調査児童・生徒質問紙調査の結果

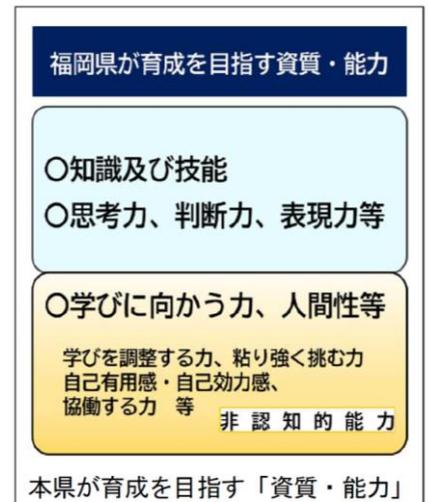
1 「学びに向かう力、人間性等」に関する回答状況

福岡県教育庁教育振興部義務教育課は、県が育成を目指す「資質・能力」について次のように述べている。

これまで、本県においては、全国学力・学習状況調査結果として、文部科学省が示す資質・能力の三つの柱のうち、主に教科に関する調査をもとに「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」の状況を分析、公表してきた。文部科学省は、資質・能力のもう一つの柱である「学びに向かう力、人間性等」は、「児童生徒が『どのように社会や世界と関わり、よりよい人生を送るか』に関わるものであり、他の二つの柱をどのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素である。」としている。そこで、本県においては、「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」ととともに、非認知的要素を多く含む「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱をバランスよく育成することを目指す。（図参照）

その上で、「学びに向かう力、人間性等」を「学びを調整する力」「粘り強く挑む力」「自己有用感・自己効力感」「協働する力」に分類し、全国学力・学習状況調査児童生徒質問項目と関連するものを次のように提示した。

これらの質問事項に関する回答を分析し、本市児童生徒の状況と課題を明らかにする。

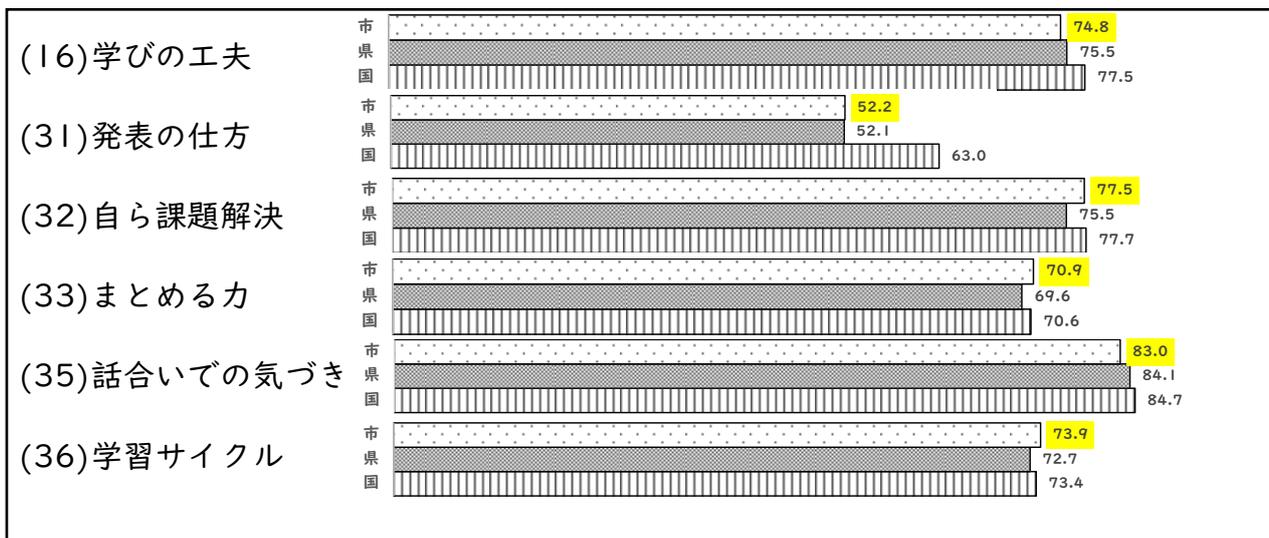


質問 No.	質問事項
学びを調整する力	
16	分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか
31	授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか
32	授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか
33	授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか
35	学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか
36	学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか
粘り強く挑む力	
7	将来の夢や目標を持っていますか
自己有用感・自己効力感	
5	自分には、よいところがあると思いますか
6	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか
協働する力	
8	人が困っているときは、進んで助けていますか
11	人の役に立つ人間になりたいと思いますか
13	自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか
27	地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか

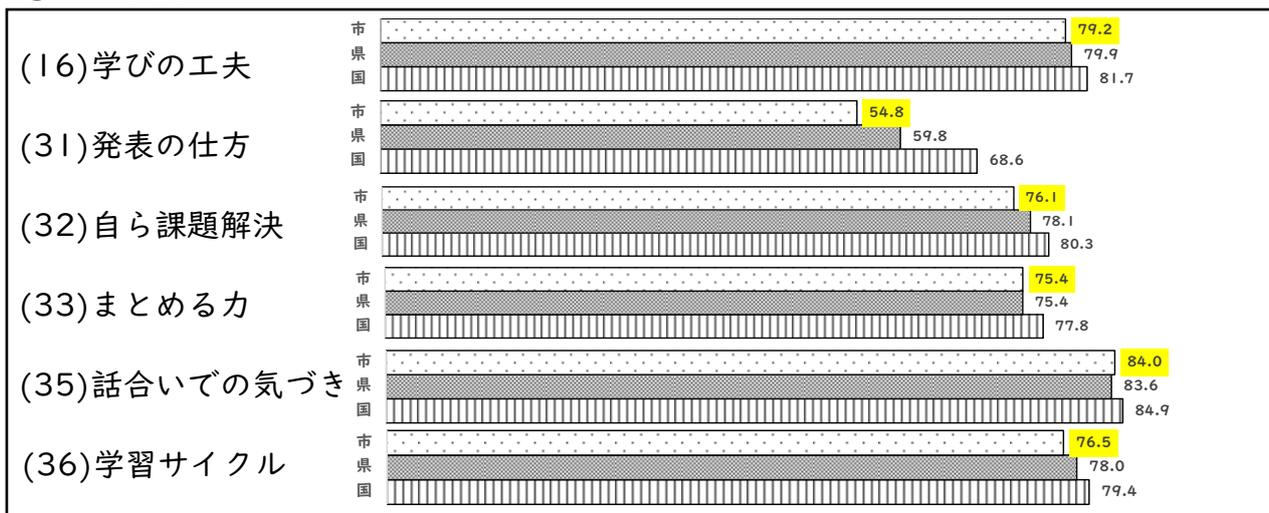
(1) 学びを調整する力※

※グラフの数値は「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と肯定的に回答した児童生徒の割合(%)

① 小学校



② 中学校



上記のグラフは、学びを調整する力に関連する調査項目に対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」など肯定的な回答を示した児童・生徒の割合である。

全6項目の調査であったが、小学校では2項目、中学校では4項目が県の水準を下回っていた。また、全国と福岡県を比較すると福岡県の水準は全体的に低い傾向にあることから、学びを調整する力については、本市の大きな課題であるといえる。

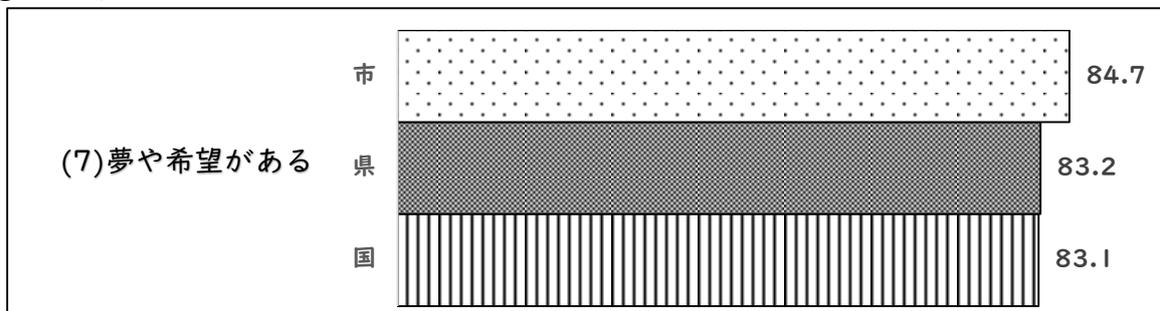
さらに、項目別に見ていくと(31)「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表することができているか。」という質問では、肯定的に回答した割合が小学校52.2%、中学校54.8%と非常に低くなっている。一方、(32)「自ら課題解決」、(33)「まとめる力」に関する質問については、肯定的な回答が70%を超えていた。

これらのことから、授業においては、課題解決に向けて自ら学んだことをまとめる場が設定されているものの、児童・生徒はそこで自分の考えをうまく伝えることができていないといえる。

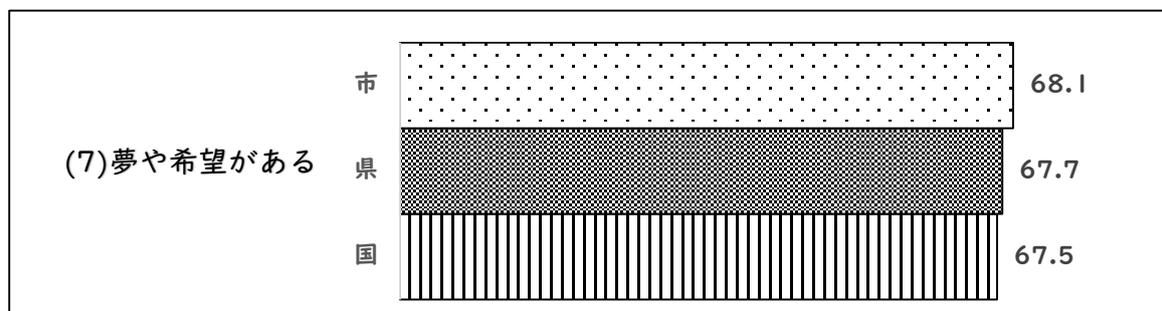
これらの課題を解決していくためには、授業において児童・生徒が安心して発表することができるように工夫していくことが必要である。

(2) 粘り強く挑む力

① 小学校



② 中学校

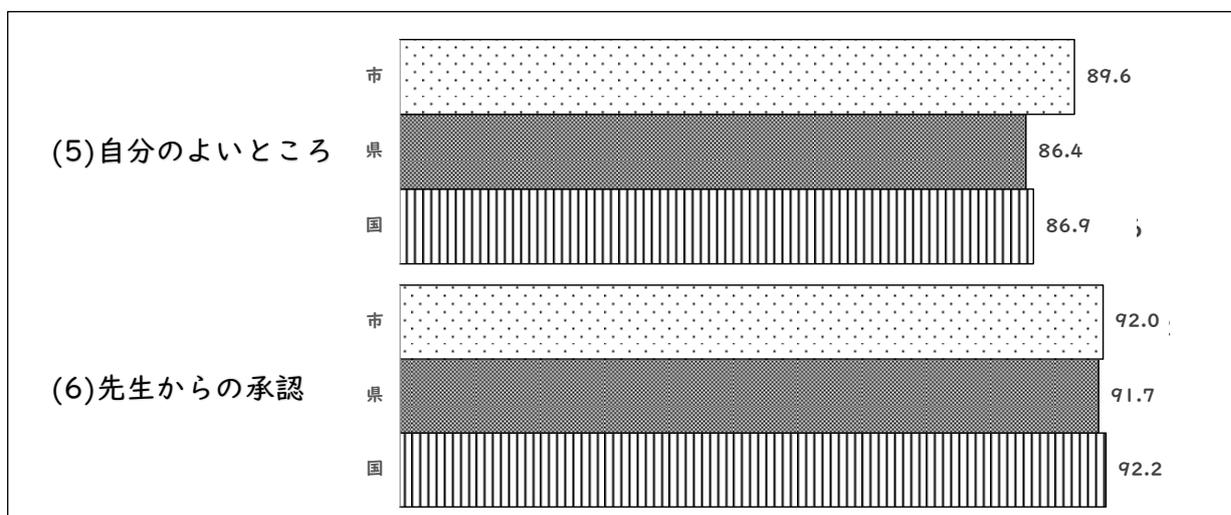


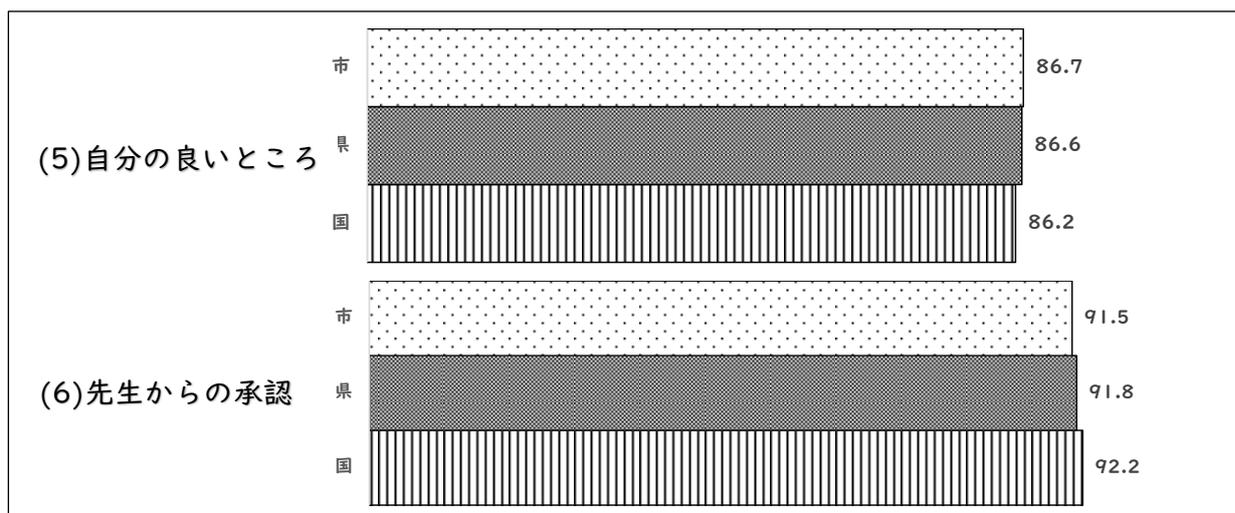
上記のグラフは、粘り強く挑む力に関連する調査項目に対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」など肯定的な回答を示した児童・生徒の割合である。

小学校、中学校ともに全国及び福岡県の数値を上回っている。社会の変動が大きいといわれる現代社会において、高い数値を維持することができていることは、本市の教育の成果であり強みでもある。その要因としては総合的な学習の時間などにおいて地域社会や地域の大人と関わる機会を創出し、将来に向けた展望を持てるようにできているからである。

(3) 自己有用感・自己効力感

① 小学校





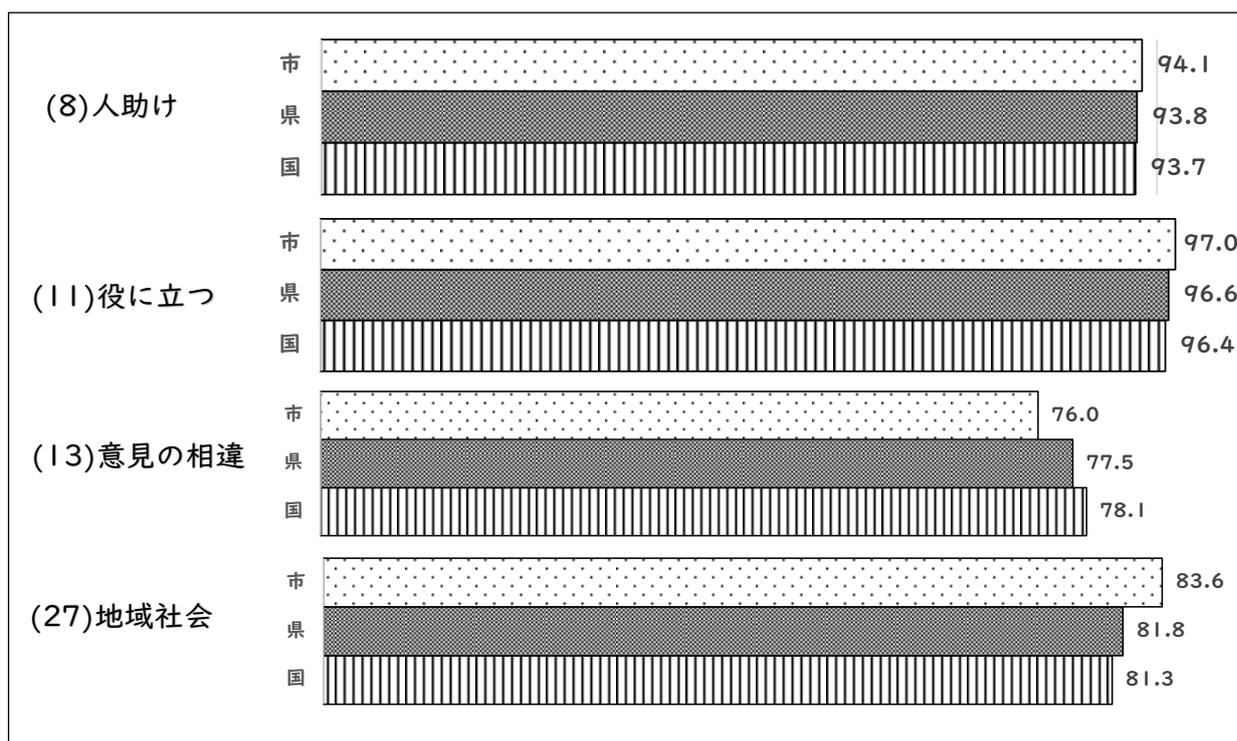
上記のグラフは、自己有用感・自己効力感に関連する調査項目に対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」など肯定的な回答を示した児童・生徒の割合である。小学校では「自分の良いところがある」と答えた割合が県よりも3.2ポイント高く、全国と比較しても2.7ポイント高かった。中学校では、「自分のよいところがある」「先生からの承認」とともに県、全国とほぼ同等の結果になっていた。

また、小・中学校ともに「先生からの承認」が「自分の良いところ」より高くなっていた。

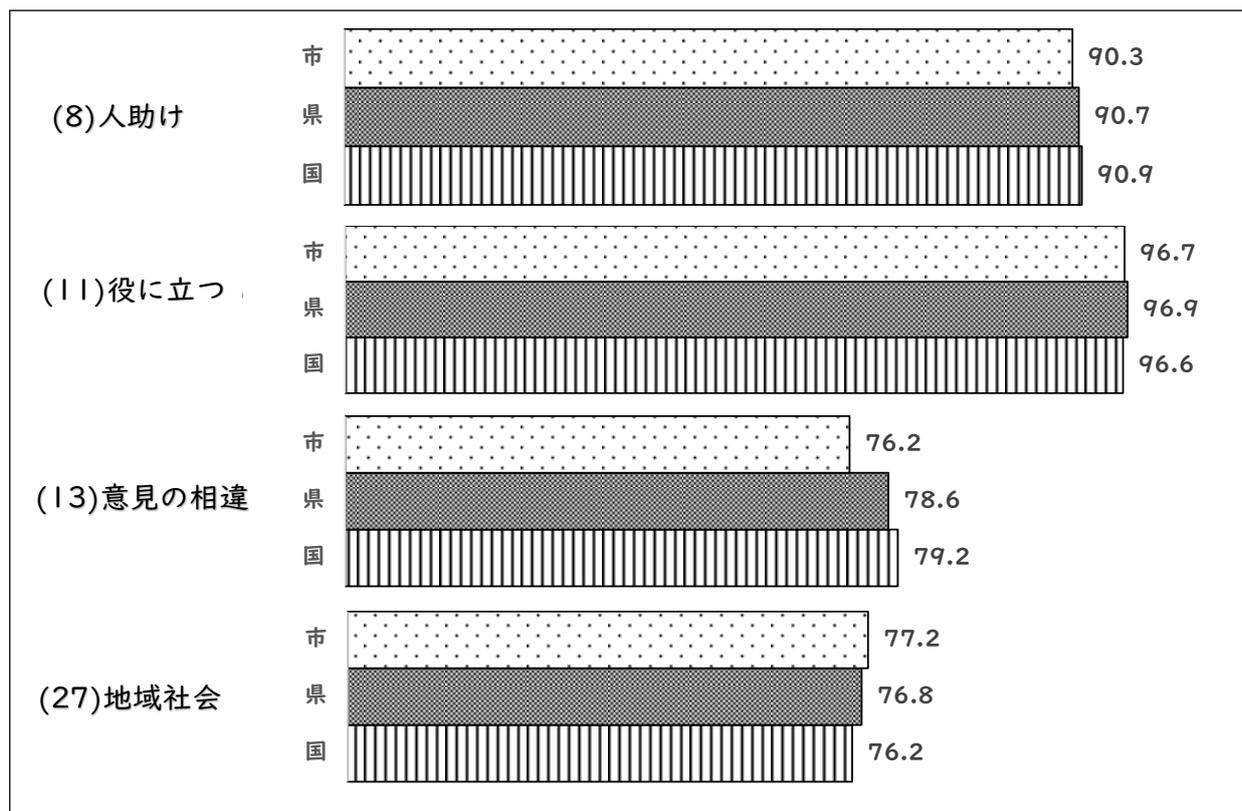
教師の承認については、年々数値が高くなっており、そのことが児童生徒の自己有用感や自己効力感に高い影響を与えていると考えられる。今後も児童・生徒と話をする時間などを計画的に創出していく必要があると考える。

(4) 協働する力

① 小学校



② 中学校



上記のグラフは、協働する力に関連する調査項目について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」という肯定的な回答をした児童・生徒の割合を示したものである。

福岡県との比較においては、小学校が1項目、中学校が3項目、低い数値となった。

特に(13)「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」の項目については、小学校が-1.5%、中学校が-2.4%といずれも福岡県を下回っていた。

これらの要因については、先述した学びを調整する力における「発表の仕方」との関連が考えられる。同分析では、児童・生徒は授業で課題解決に向けて自ら学んだことをまとめる場が設けられているものの、そこで学んだことを発表することができていなかった。

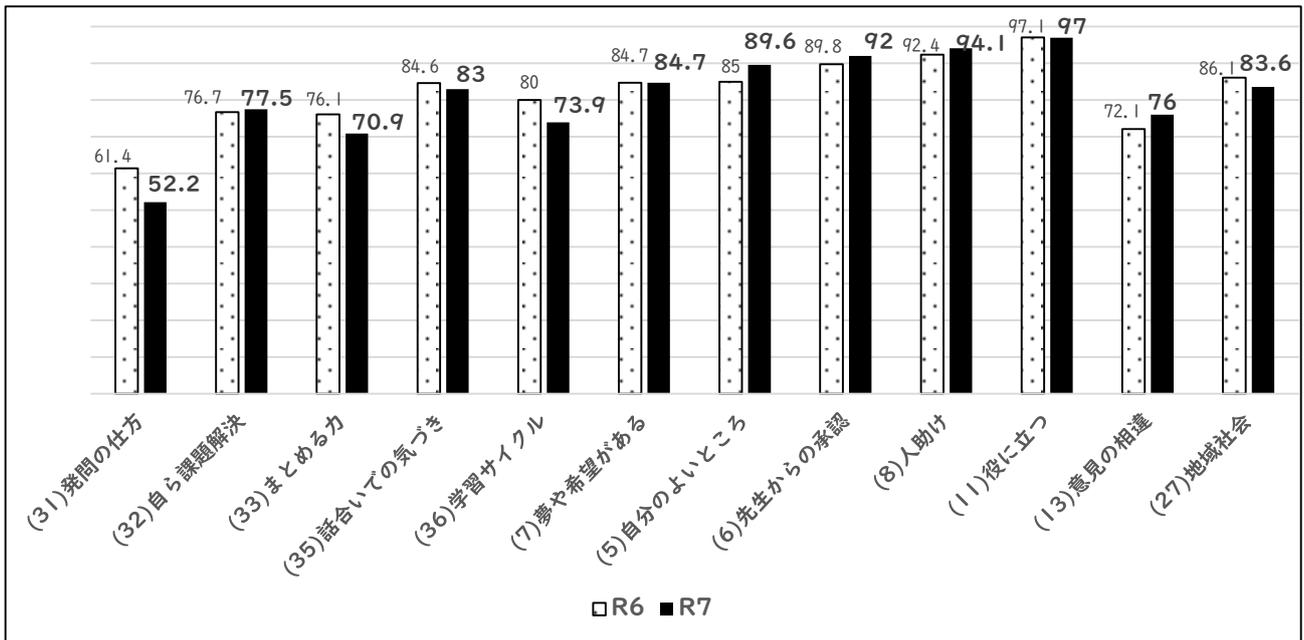
このことから、学級活動における合意形成が不足していることから授業での話し合いが形式的なものになってしまっているなど心理的安全性が保たれていないといえる。

現在、個別最適な学びと協働的な学びを一体とした授業が進められているが、他者との関わり方についてさらに力点を置く必要がある。

(5) 経年比較

(質問 No.16 は令和6年度調査から変更のため比較なし)

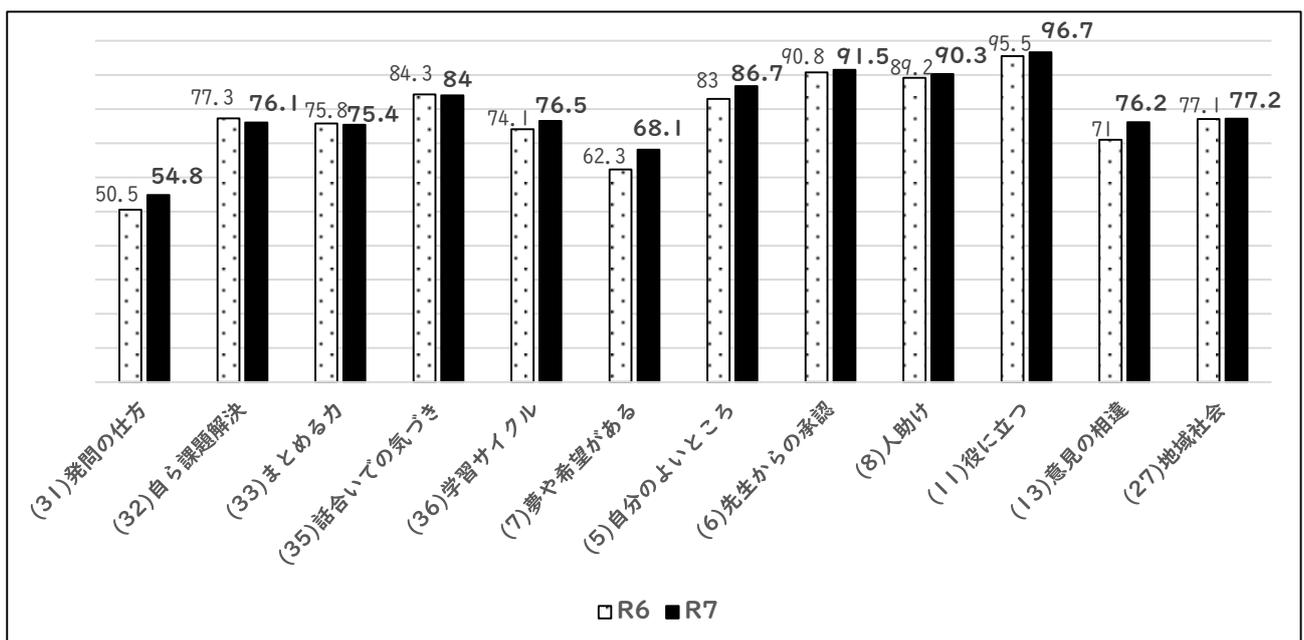
① 小学校



令和6年度と比較すると6つの項目で前年度を下回った。前年度を下回った多くの項目は1%程度の誤差であったが、(31)発問の仕方、(36)学習サイクルについては大きな低下が見られた。一方で、(13)意見の相違楽しい、(5)自分のよいところについては大きな向上が見られた。毎年、異動により教職員が入れ替わっていく教育現場においては、誰が抜けても同様の支援が継続できる仕組みを構築していくことが必要である。

また、多様化していく社会に対応していくためにも教職員、SC、SSW等との連携を強化し「チーム学校」として支援にあたる必要がある。

② 中学校



令和6年度と比較すると3つの項目が前年度を下回った。前年度を下回った多くの項目は1%程度の誤差であった。一方で、8つの項目が前年度を上回り、中でも(7)夢や目標がある、(13)意見相違楽しいについては5%を上回る向上が見られた。小学校同様に毎年、異動により教職員が入れ替わっていく教育現場においては、誰が抜けても同様の支援が継続できる仕組みを構築していくことが必要である。また、多様化していく社会に対応していくためにも教職員、SC、SSW等との連携を強化し「チーム学校」として支援にあたる必要がある。

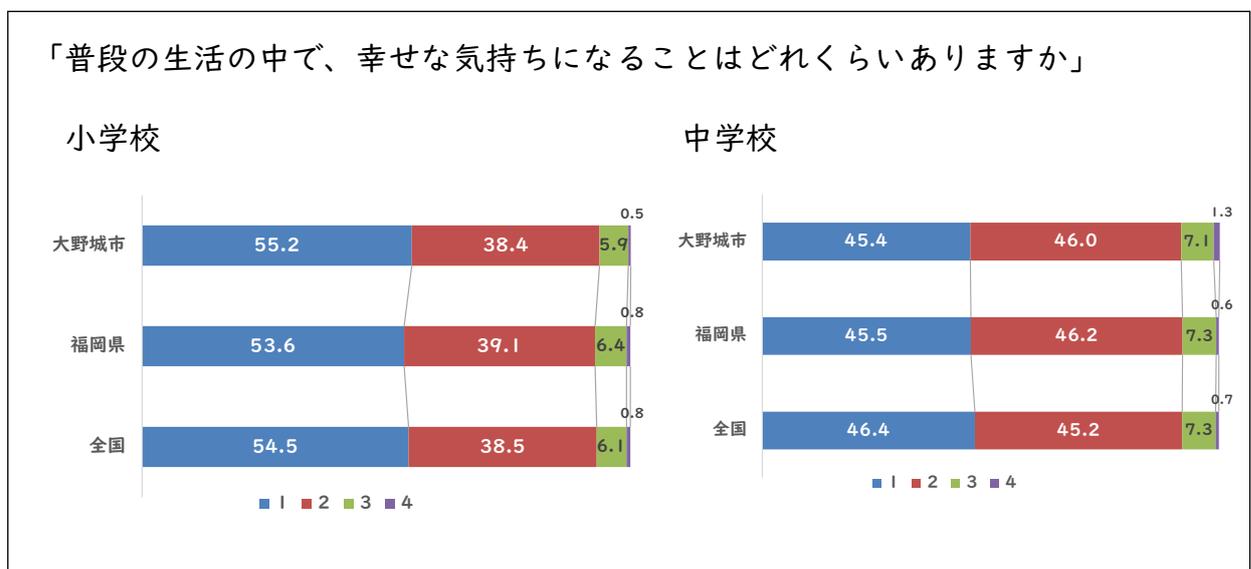
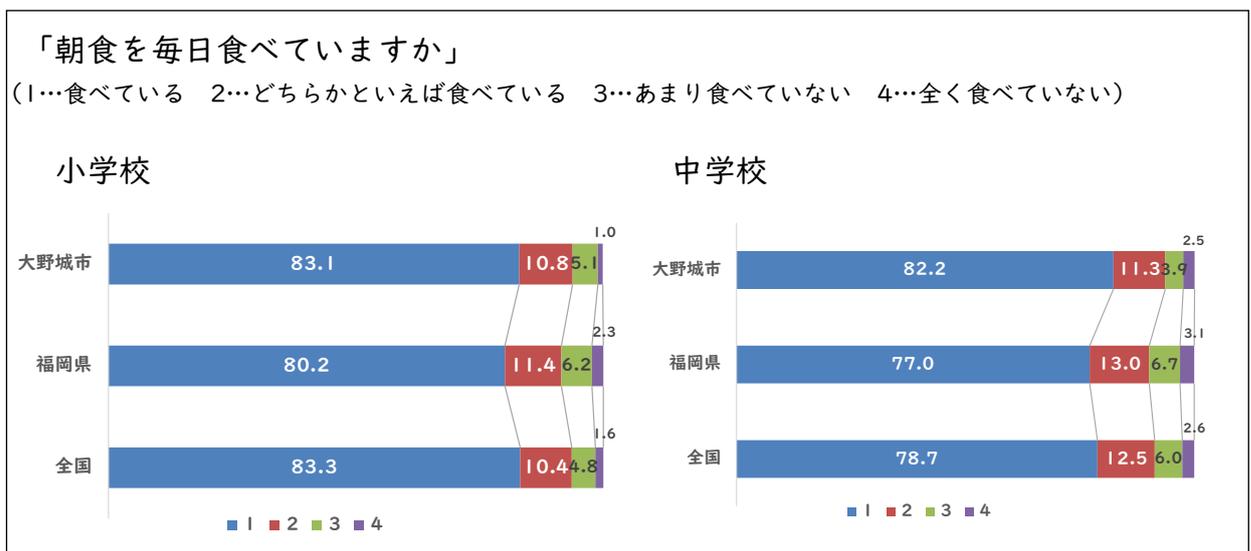
2 その他

その他の質問において「生活に関する項目」「学校生活に関する項目」「授業に関する項目」について分析する。

※グラフ中凡例の記載がないものは以下を適用

(1…あてはまる 2…どちらかといえばあてはまる 3…どちらかといえばあてはまらない 4…あてはまらない)

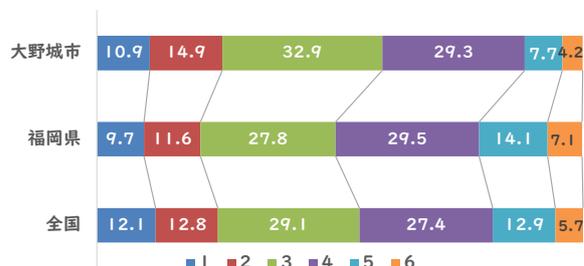
① 生活に関する項目



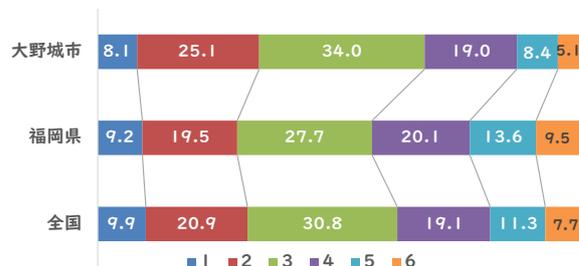
「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」

(1…3時間以上 2…2時間以上3時間より少ない 3…1時間以上2時間より少ない 4…30分以上1時間より少ない 5…30分より少ない 6…全くしない)

小学校



中学校



生活に関する項目については、朝食をとる習慣については、小中学校ともに「食べている」「どちらかといえば食べている」と回答した割合が福岡県の数値よりも高くなっていた。しかし、全く食べていないと回答した児童生徒がそれぞれ1.0%(10人)、2.5%(23人)おり、これらについては、他のアンケートや教育相談により原因を把握していく必要がある。

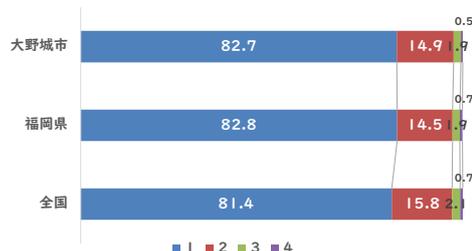
次に、「普段の生活で幸せな気持ちになるか」の項目では小中学校ともに全国、福岡県とほぼ同じ水準であった。小中学校で比較すると中学校のほうがやや低い数値となっていることから、中学生は習い事等で家庭生活にゆとりを感じる事が少ないのではなかいかと考える。また、中学校では「全くない」と回答した生徒が1.3%(12人)だった。これは、全国、県の平均と比較しても高い数値であった。

さらに、学校以外での学習時間については、全国、福岡県よりも1日当たりの学習時間が長くなっていた。特に、勉強時間が30分以下の児童生徒の割合が全国、福岡県に比べて非常に低かった。1日当たりの勉強時間の長さが学力に影響を与えていると考えられる。

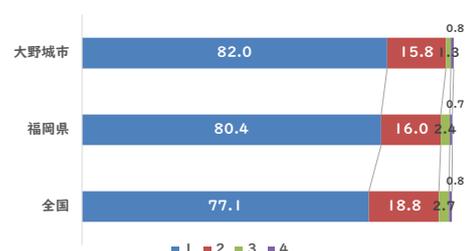
② 学校生活に関する項目

「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」

小学校

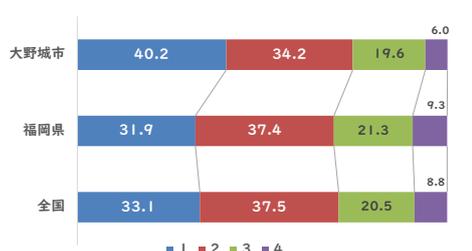


中学校

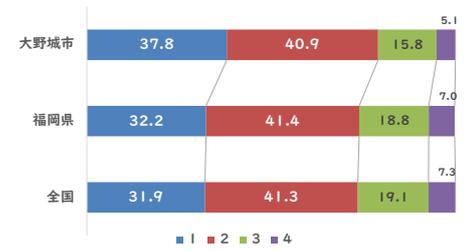


「困りごとや不安がある時に先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」

小学校



中学校

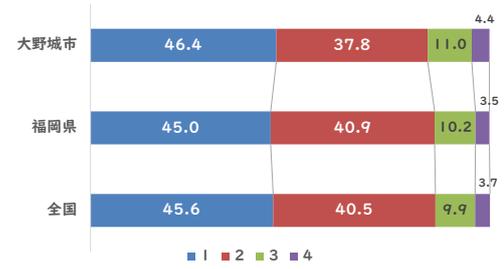


「学校に行くのは楽しいと思いますか」

小学校



中学校

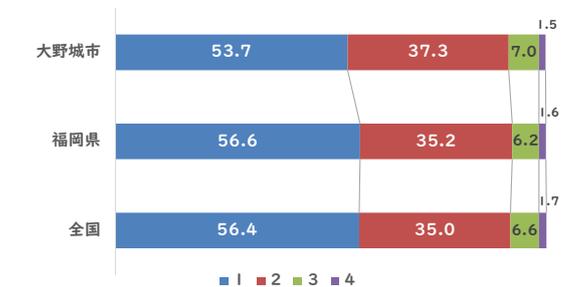


「友達関係に満足していますか」

小学校



中学校



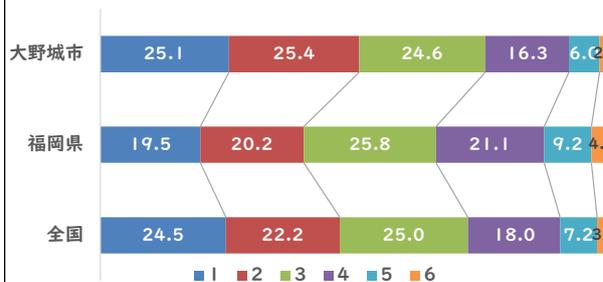
学校生活に関する項目については、いじめに対する認識が全国、福岡県平均に比べて高くなっていった。これは、市全体で取り組んでいる心の教育の結果といえる。

また、「学校に行くのは楽しい」については、「当てはまる」または「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童生徒の割合が全国、福岡県の平均とほぼ変わらなかった。さらに、「友人関係に満足していますか」については、「満足している」「どちらかといえば満足している」と回答した割合が9割を超えていた。これらのことから、今後も継続して児童生徒主体の学校づくりを推進していく。

③ 授業に関する項目

「4、5（1、2）年生のときに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」（1…ほぼ毎日（1日複数回） 2…ほぼ毎日（1日に1回） 3…週3以上 4…週1 5…月1回以上 6月1回未満） 30分より少ない 6…全くしない）

小学校

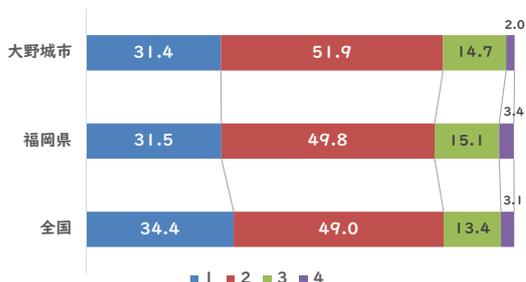


中学校



「5（2）年生のときに受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか」

小学校

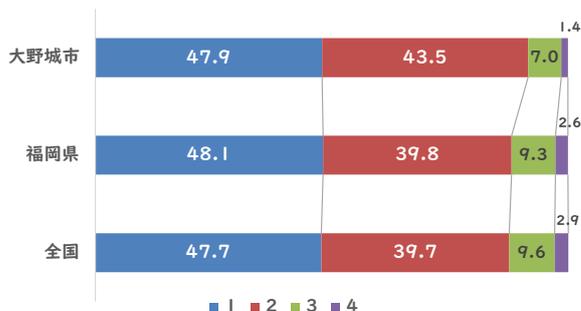


中学校

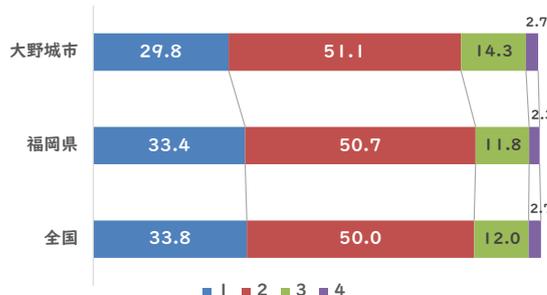


「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」

小学校

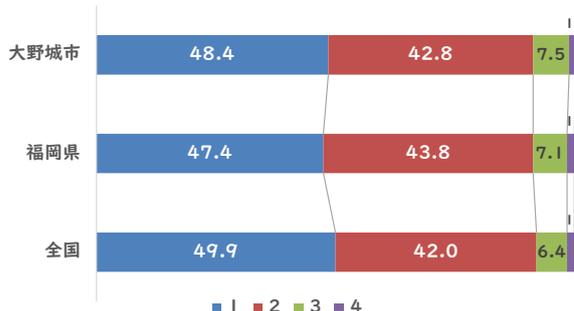


中学校

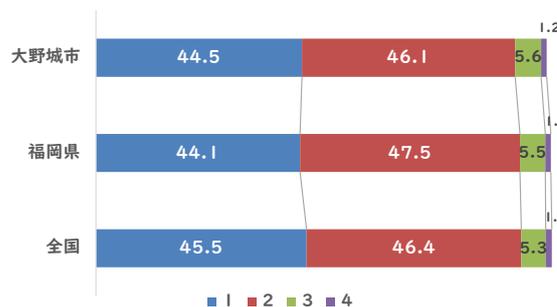


「授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか」

小学校



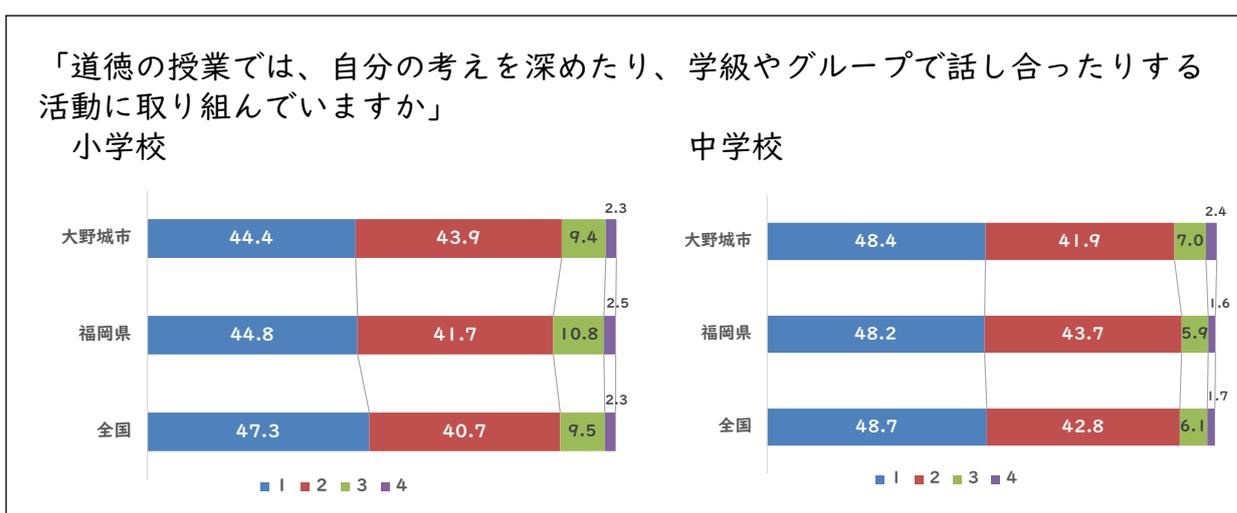
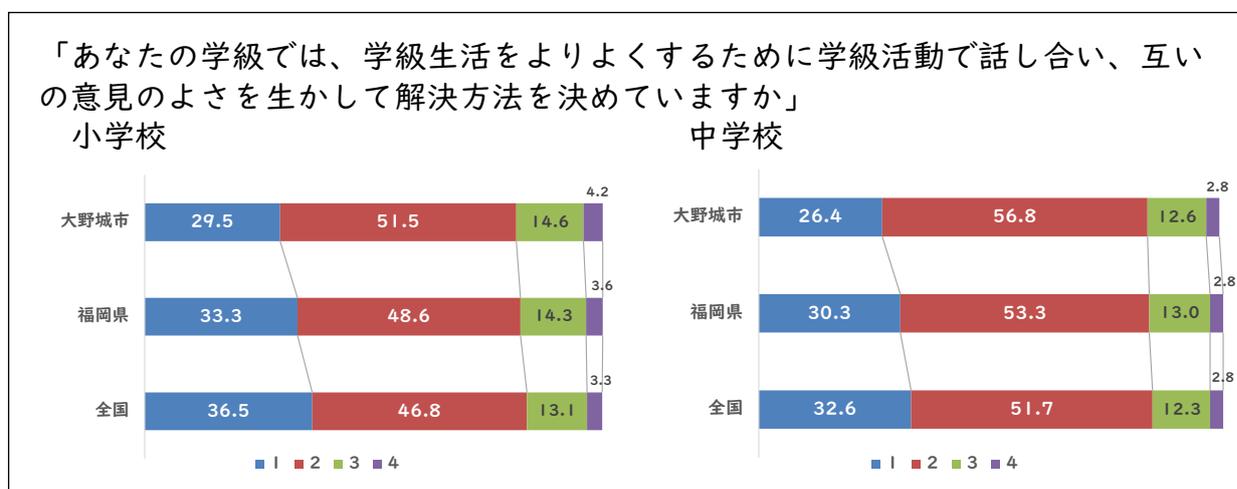
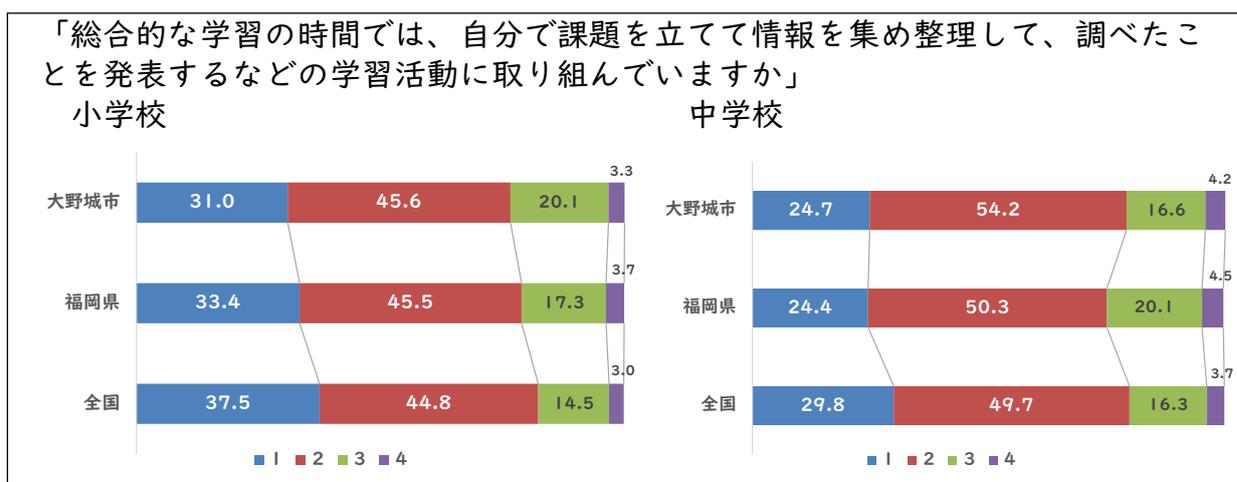
中学校



授業に関する項目については、ICTの活用で小中学校ともに全国、福岡県よりも活用が進んでいることがわかった。また、「5（2）年生のときに受けた授業」については、小中学校ともに肯定的な回答が高い数値になっていた。

「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」については、は「当てはまる」の割合が小学校47.9%に対し、中学校は29.8%であった。全国や県においても同様の傾向が見られた。中学校では学習内容が増えるため、個に応じて復習など学びなおせ

る場を作っていくことが必要である。



総合的な学習の時間、学級活動の時間については、「あてはまる」の割合が全国と比較すると5ポイント以上低くなっている。道徳についても小学校が2.9ポイント低くなっている。このことから、発表する場や話し合いなどの交流をより増やしていくことが必要である。

V 令和7年度福岡県学力調査の結果

- 1 調査日時 令和7年6月18日(水)
- 2 対象児相生徒 小学校第5学年及び中学校第1学年、第2学年
- 3 調査方法 小学校第5学年 国語、算数
中学校第1学年、第2学年 国語、数学
- 4 調査結果(平均正答率)

(1) 小学校

第5学年	国語	算数
大野城市	64.6	51.7
福岡県	60.8	48.0
県平均比	106.3	107.7
R6 県平均比 〔比較〕	109.0 [-2.7]	109.3 [-1.6]

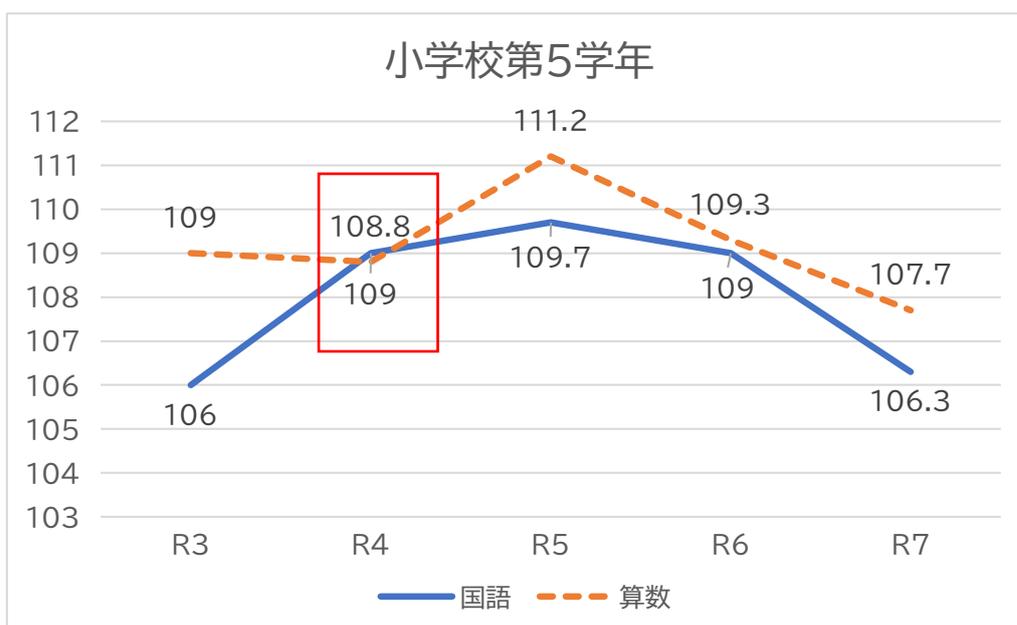
(2) 中学校

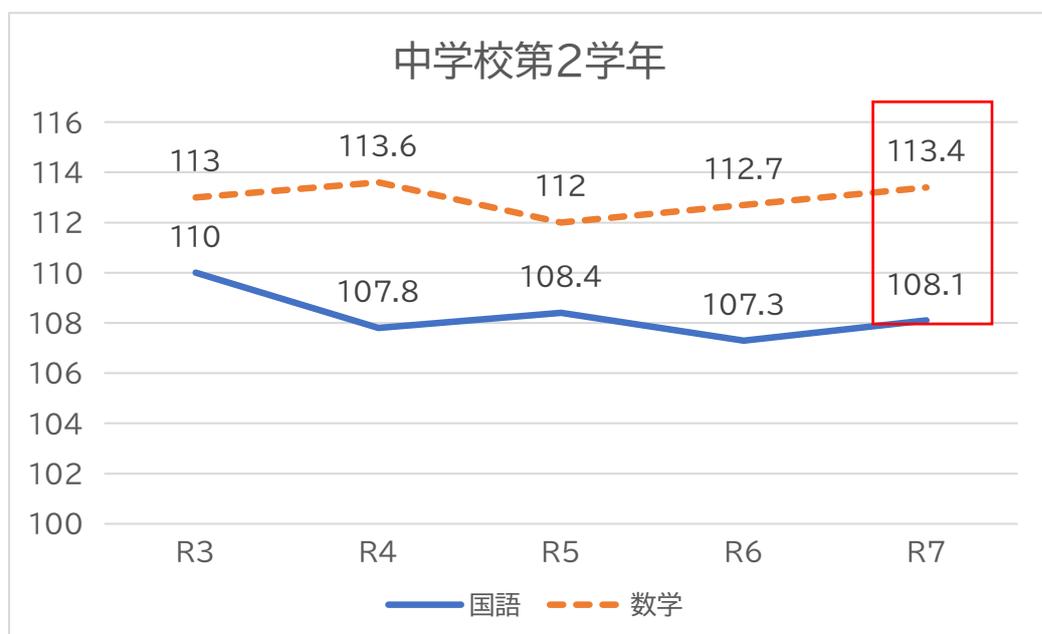
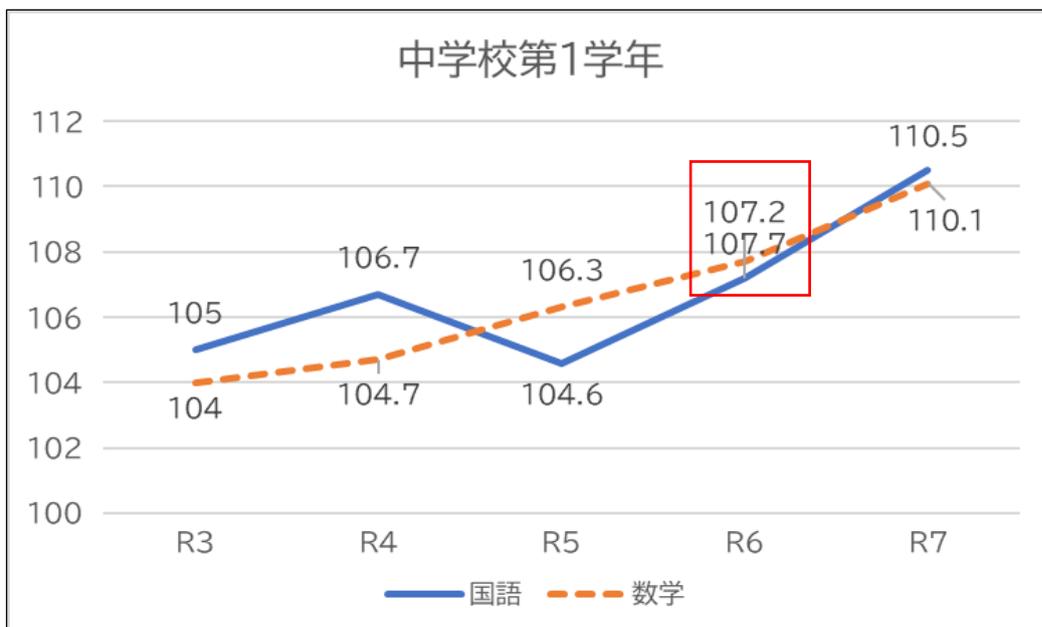
第1学年	国語	数学
大野城市	66.5	56.9
福岡県	60.2	51.7
県平均比	110.5	110.1
R6 県平均比 〔比較〕	107.2 [+3.3]	107.7 [+0.4]

第2学年	国語	数学
大野城市	57.1	55.9
福岡県	52.8	49.3
県平均比	108.1	113.4
R6 県平均比 〔比較〕	107.3 [+0.8]	112.7 [+0.7]

※ 県平均比は(正答率÷県平均正答率)×100で算出

(3) 経年変化(県平均比)





- 全ての学年及び教科において福岡県平均を上回っている。本市小・中学校における授業やカリキュラム・マネジメントが充実していることがいえる。
- 小学校では、過去3年間の県平均比が国語、算数ともに数値が下がっている。
- 中学校第1学年では、過去3年間の県平均比が国語、数学ともに上昇している。
- 中学校第2学年では、過去3年間の県平均比が国語はほぼ横ばい、数学は若干上昇している。
- 図中の赤枠は同一児童生徒を表している。これによると国語については、5年生で109だった数値が中学1年生で107.2、中学2年生で108.1と若干下降していることがわかる。また、算数・数学については小学5年生で108.8だった数値が中学1年生で107.7、中学2年生で113.3と増減していることがわかる。国語、数学ともに中学校1年生で数値が減少している。このことから中学1年における学習指導が生徒の実態に即したものになっているか検証する必要がある。

5 調査結果（学習指導要領の領域）

（1）小学校5年生国語

ア 学習指導要領の領域別

※（ ）は令和6年度の数值

領域	大野城市	福岡県	福岡県比
言葉の特徴や使い方	76.0	73.6	103.3(108.3)
情報の扱い方、 我が国の言語文化	64.8	62.0	104.5(注1)
話すこと・聞くこと 書くこと	47.2	43.1	109.5(113.3)
読むこと	60.4	54.3	111.2(106.8)

注1：領域「情報の扱い方、我が国の言語文化」は令和6年度にはないため未記入

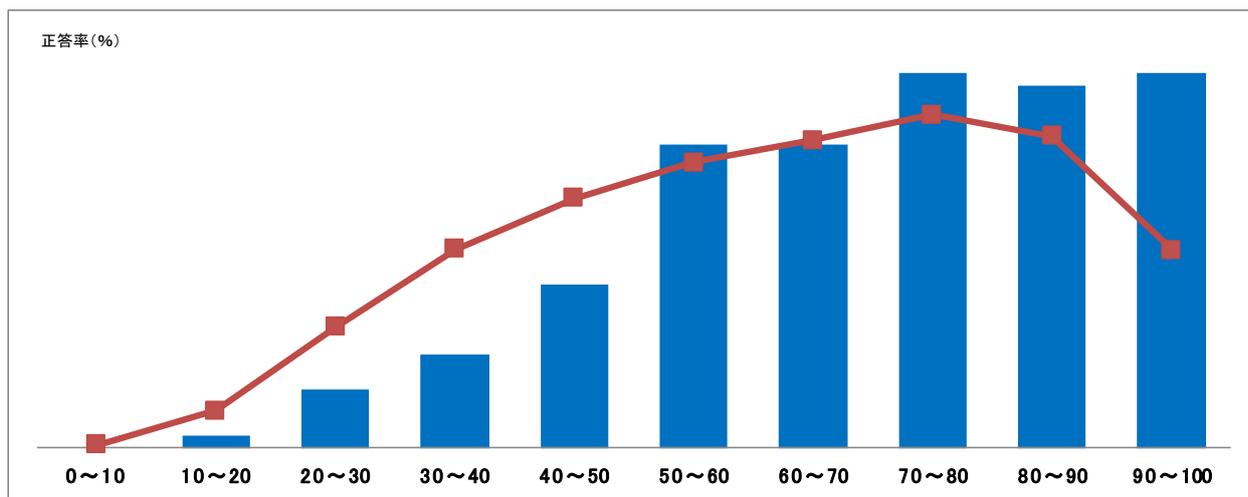
イ 評価の観点別正答率

評価の観点	大野城市	福岡県	福岡県比
知識・技能	73.2	70.7	103.5(108.3)
思考・判断・表現	54.7	49.5	110.5(110.1)

ウ 正答率分布（％）

■ …大野城市の正答率分布

■ … 県全体の正答率分布



エ 分析

- 全ての領域において福岡県比を上回っている。特に、「読むこと」については福岡県比111.2と大きく上回っていた。また、「書くこと」については、福岡県比は高いが正答率は47.2と最も低い。「書くこと」の習熟には時間を要するため、低学年からの系統的な指導が必要と考える。
- 評価の観点別正答率においては、両観点ともに福岡県比を大きく上回っていた。基礎的な力に加えて思考力、判断力、表現力等が求められる問題にも対応できる力が備わっていることを示している。
- 令和6年度の福岡県比と比較すると、やや数値が下がっている。特に、「言葉の特徴や使い方」の領域では、5.0ポイントと大きく下降した。
- 正答率分布においては、福岡県と比較すると50%以下の分布が非常に低くなっていた。昨年度の四分位層においてもC、D層が少なかったことから良好な状態が継続しているといえる。今後は個に応じた学習により50%以下の層をフォローし

ていきたい。

(2) 小学校5年生算数

ア 学習指導要領の領域別

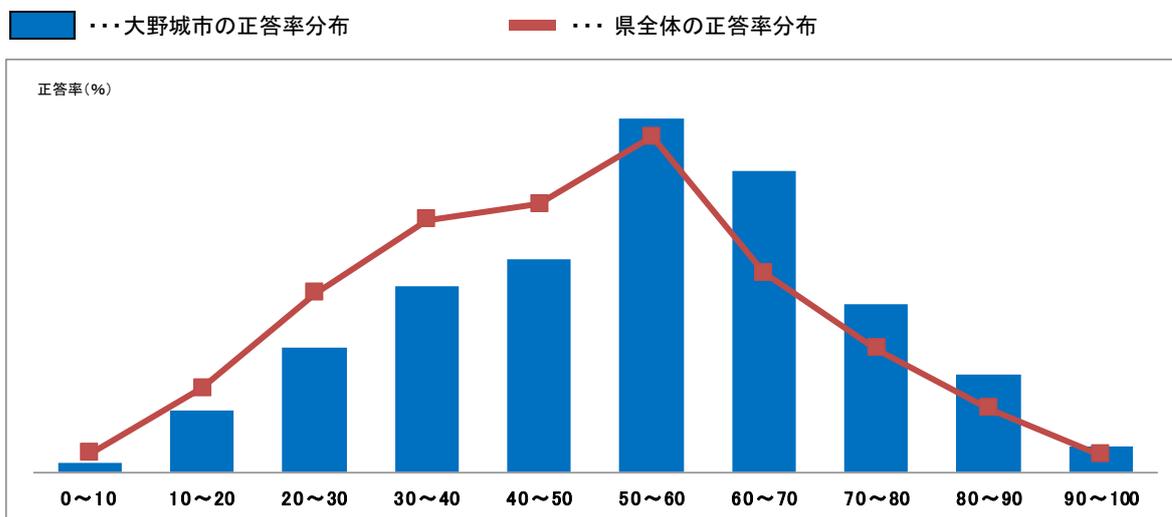
※ () は令和6年度の数値

領域	大野城市	福岡県	福岡県比
数と計算	54.1	51.4	105.3(108.9)
図形	56.0	51.7	108.3(109.5)
変化と関係	41.3	35.8	115.4(111.6)
データの活用	50.3	47.0	107.0(108.0)

イ 評価の観点別正答率

評価の観点	大野城市	福岡県	福岡県比
知識・技能	54.3	50.7	107.1(107.4)
思考・判断・表現	48.5	44.5	109.0(111.9)

ウ 正答率分布 (%)



エ 分析

- 全ての領域において福岡県比を上回っている。特に、「変化と関係」については福岡県比115.4と非常に高い数値となっていた。しかし、正答率は41.3と最も低く、さらなる指導方法の工夫が求められる。
- 評価の観点別正答率においては、両観点ともに福岡県比を大きく上回っている。基礎的な力に加えて思考力、判断力、表現力等が求められる問題にも対応できる力が備わっていることを示している。
- 令和6年度の福岡県比と比較すると、やや数値が減少している。しかし、大きく数値が減少している分野もなく現状を維持しているといえる。
- 正答率分布においては、福岡県と比較すると50%以下の分布が非常に低くなっていた。国語と同様に良好な状態が維持されているといえる。一方で、90点以上の最上位層は福岡県と同等の分布になっている。このことから、最上位層もフォローできるように個に応じた指導を行っていく必要がある。

(3) 中学校 1 年生国語

ア 学習指導要領の領域別

※ () は令和 6 年度の数値

領域	大野城市	福岡県	福岡県比
言葉の特徴や使い方	69.6	63.4	109.8(107.0)
情報の扱い方 我が国の言語文化	70.0	65.0	107.7(注 2)
話すこと・聞くこと 書くこと	64.6	55.8	115.8(107.5)
読むこと	60.3	54.3	111.0(108.2)

注 2：領域「情報の扱い方、我が国の言語文化」は令和 6 年度にはないため未記入

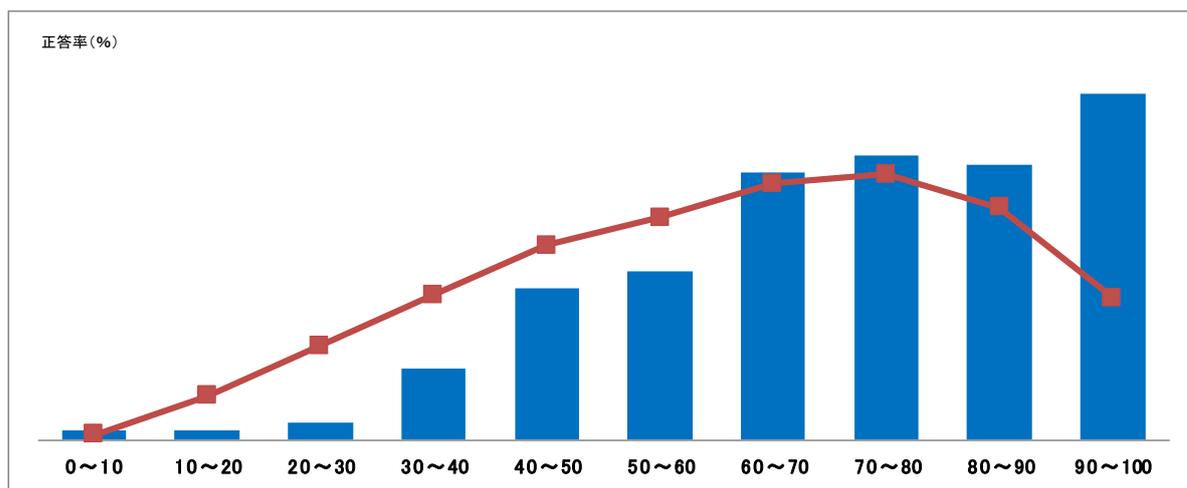
イ 評価の観点別正答率

評価の観点	大野城市	福岡県	福岡県比
知識・技能	69.7	63.7	109.4(107.0)
思考・判断・表現	61.7	54.8	112.6(107.6)

ウ 正答率分布 (%)

■ … 大野城市正答率分布

—■— … 県全体の正答率分布



エ 分析

- 全ての領域において福岡県比を上回っている。特に、「書くこと」については福岡県比 115.8 と非常に高い数値となった。また、「読むこと」についても、福岡県比 111.0 と高い数値を示した。すべての領域で正答率が 60% を超えていることから良好な状態が維持されているといえる。
- 評価の観点別正答率においては、両観点ともに福岡県比を大きく上回っていた。特に、「思考、判断、表現」については福岡県比 112.6 と非常に高い数値を示した。求められる問題にも対応できる力が備わっていることを示している。
- 令和 6 年度の福岡県比と比較すると、数値が上昇している。特に、「思考・判断・表現」については、5.0 ポイントと大きな上昇が見られた。
- 正答率分布においては、全カテゴリーの中で最上位層の分布が最も多かった。また、正答率 60% 以下の分布が県と比較すると非常に少ないことがわかる。これらのことから、小学 6 年時における指導が上位層に効果的だったことが分かる。

(4) 中学校 1 年生 数学

ア 学習指導要領の領域別

※ () は令和 6 年度の数值

領域	大野城市	福岡県	福岡県比
数と計算	63.9	59.8	106.9(108.5)
図形	55.3	49.5	111.7(105.8)
変化と関係	55.6	49.5	112.3(106.8)
データの活用	47.9	43.2	110.9(108.7)

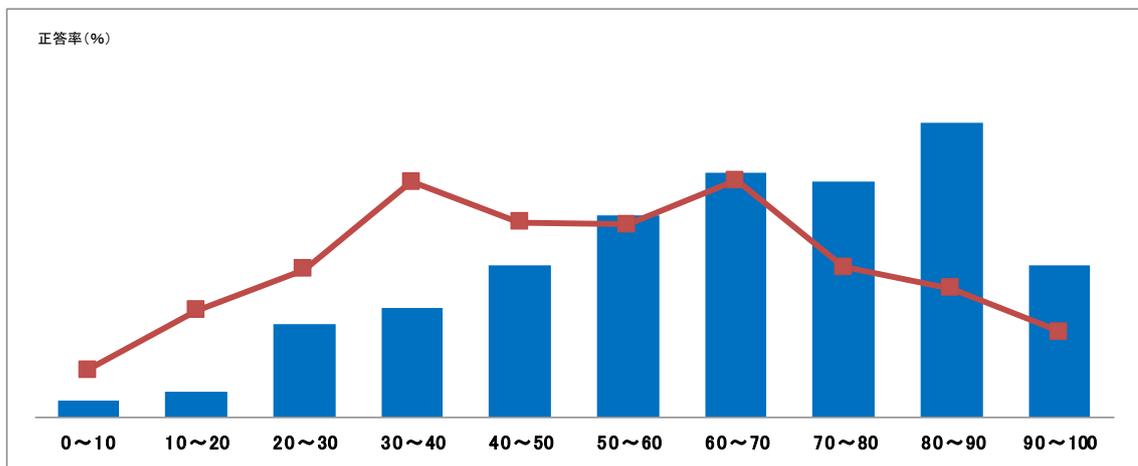
イ 評価の観点別正答率

評価の観点	大野城市	福岡県	福岡県比
知識・技能	57.4	52.3	109.8(106.6)
思考・判断・表現	54.1	48.1	112.5(109.1)

ウ 正答率分布 (%)

■ …大野城市正答率分布

— … 県全体の正答率分布



エ 分析

- 全ての領域において福岡県比を大きく上回っている。しかし、「データの活用」については、正答率が 47.9 と低くなっていた。
- 評価の観点別においては、両観点ともに福岡県比を上回っている。基礎的な力に加えて思考、判断、表現等が求められる問題にも対応できる力が備わっていることを示している。
- 令和 6 年度の福岡県比と比較すると、「数と計算」以外の領域で数値が大きく上昇している。特に、「図形」の領域では、5.9 ポイントと大きな上昇が見られた。
- 正答率分布においては、県の分布と異なり、正答率 80%~90% 層が最も多くなっていた。また、国語と同様に 50% 以下の分布が非常に低くなっていた。昨年度の四分位層においては、D 層が 15% であったことを考えると良い傾向であることがいえる。

(5) 中学校 2 年生国語

ア 学習指導要領の領域別 ※ () は令和 6 年度の数值

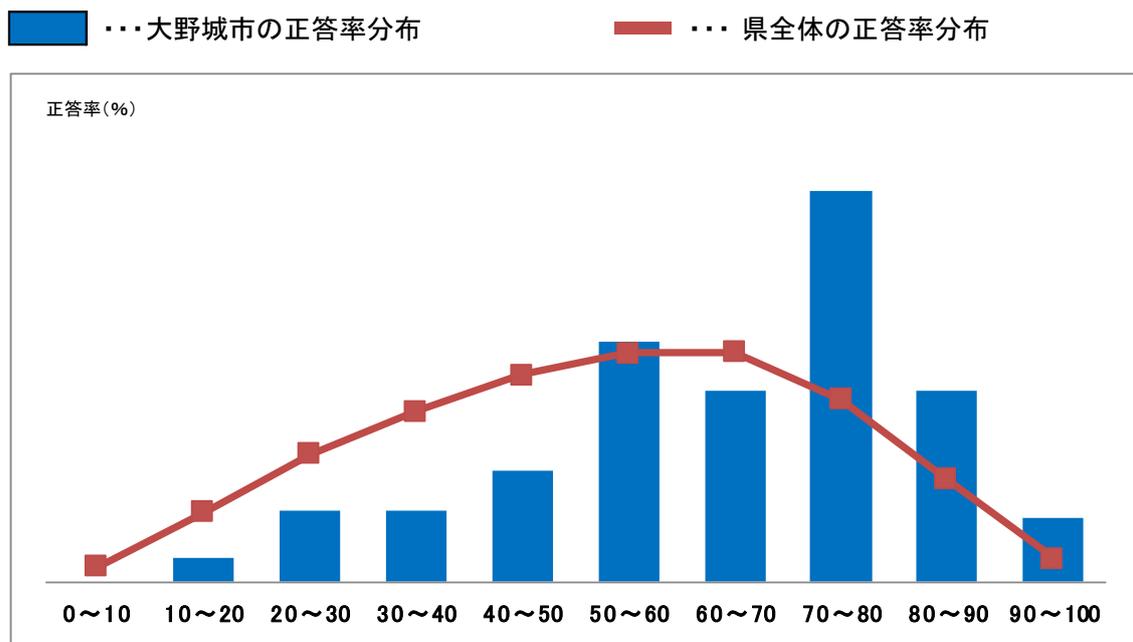
領域	大野城市	福岡県	福岡県比
言葉の特徴や使い方	61.6	57.6	106.9(105.9)
情報の扱い方 我が国の言語文化	47.9	44.6	107.4(注 3)
話すこと・聞くこと 書くこと	66.4	61.8	107.4(107.4)
読むこと	52.5	46.9	111.9(110.9)

注 3：領域「情報の扱い方、我が国の言語文化」は令和 6 年度にはないため未記入

イ 評価の観点別正答率

評価の観点	大野城市	福岡県	福岡県比
知識・技能	56.8	53.0	107.2(105.9)
思考・判断・表現	57.6	52.3	110.1(108.0)

ウ 正答率分布 (%)



エ 分析

- 全ての領域において福岡県比を上回っている。中学 2 年では「書くこと」に加えて「読むこと」の問題に難しさを感じていることが分かる。「書くこと」の系統的な指導はもちろん、「読むこと」については、各学校の生徒の課題を把握し指導の改善を図る必要がある。
- 評価の観点別では両観点ともに福岡県比を大きく上回っている。基礎的な力に加えて思考、判断、表現等が求められる問題にも対応できる力が備わっていることを示している。
- 令和 6 年度の福岡県比と比較すると、ほとんどの分野で数値が上昇している。
- 正答率分布においては、70%から 80%の層が一番に多く、福岡県と全く違う傾向になっている。また、50%以下の層が非常に少なくなっており、このことが大野

城市全体の正答率の高さに繋がっていると考えられる。現状、下位層は多くはないが、子ども同士の学び合いの時間を設定するなど指導方法を工夫することで底上げを図りたい。

(6) 中学校 2 年生 数学

ア 学習指導要領の領域別

※ () は令和 6 年度の数值

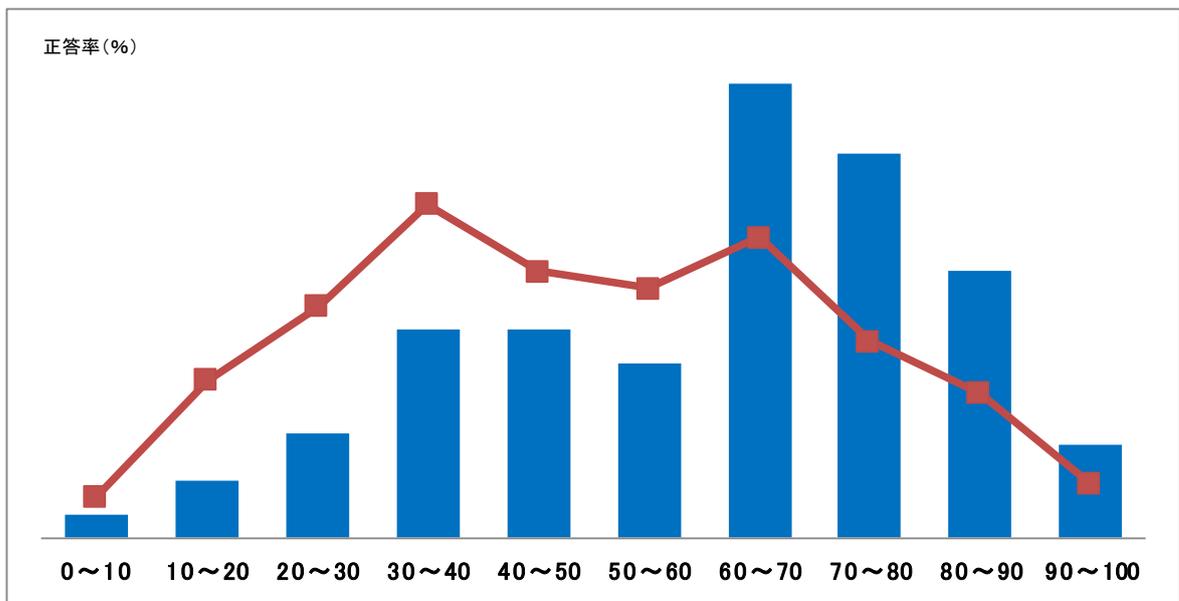
領域	大野城市	福岡県	福岡県比
数と式	62.9	55.6	113.1(114.1)
図形	44.2	38.1	116.0(110.1)
関数	58.7	52.5	111.8(108.4)
データの活用	55.5	49.0	113.3(118.9)

イ 評価の観点別正答率

評価の観点	大野城市	福岡県	福岡県比
知識・技能	60.3	52.2	115.5(111.0)
思考・判断・表現	49.9	45.4	109.9(117.4)

ウ 正答率分布 (%)

■ …大野城市の正答率分布 ■ … 県全体の正答率分布



エ 分析

- 全ての領域において福岡県比を大きく上回っている。特に「図形」については、福岡県比 116 と大きく上回っていた。しかし、正答率は 44.2% と高くない。中学 1 年時の「図形」問題も数値が低かったことから、課題を感じている生徒が多いことが考えられる。
- 評価の観点別では両観点ともに福岡県比を大きく上回っている。特に、「知識・技能」では福岡県比 115.5 となっており、基礎的な学習内容が定着していることが伺える。
- 令和 6 年度の福岡県比と比較すると、数値が減少している。特に、「データの活用」の領域では、5.6 ポイント減少しており、ICT の活用が増えている中、どのような

要因で減少したのかを明らかにしていく必要がある。

- 正答率分布においては、60%から70%の層が一番多く、さらに60%以上の層が非常に多かった。一方で、0%～10%の層の生徒が一定数いることから、誰一人取り残さない授業を意識して、授業改善を進めていく必要がある。